

～被爆・戦後70年を迎えて～

過去から継承 未来への

今をどう生きるか



長崎の鐘の打鐘を
いつまでも引き継ごう未来へ
核も戦争もない
平和な地球を子供たちへ

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会

～被爆・戦後70年を迎えて～

過去からの継承 未来への

今をどう生きるか

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会

～被爆・戦後70年を迎えて～

過去からの**継承** 未来への

今をどう生きるか



まなこ閉じれば

今も脳裏にまごまごごと

よみがえりくる

あの地獄絵図

空白の20時間

—原爆被爆惨状絵図—序文より



長崎の鐘 第1号

長崎市平和公園

被爆33回忌を迎えた昭和52年（1977）7月落成したものであって、原爆殉難者の冥福と世界の恒久平和を祈念して作製されたものです。

除幕式 1977年8月5日
典には、諸谷市長をはじめ被爆者1000名が参列して盛大に開催されました。



長崎の鐘 第2号

ソ連邦・
レニングラード市

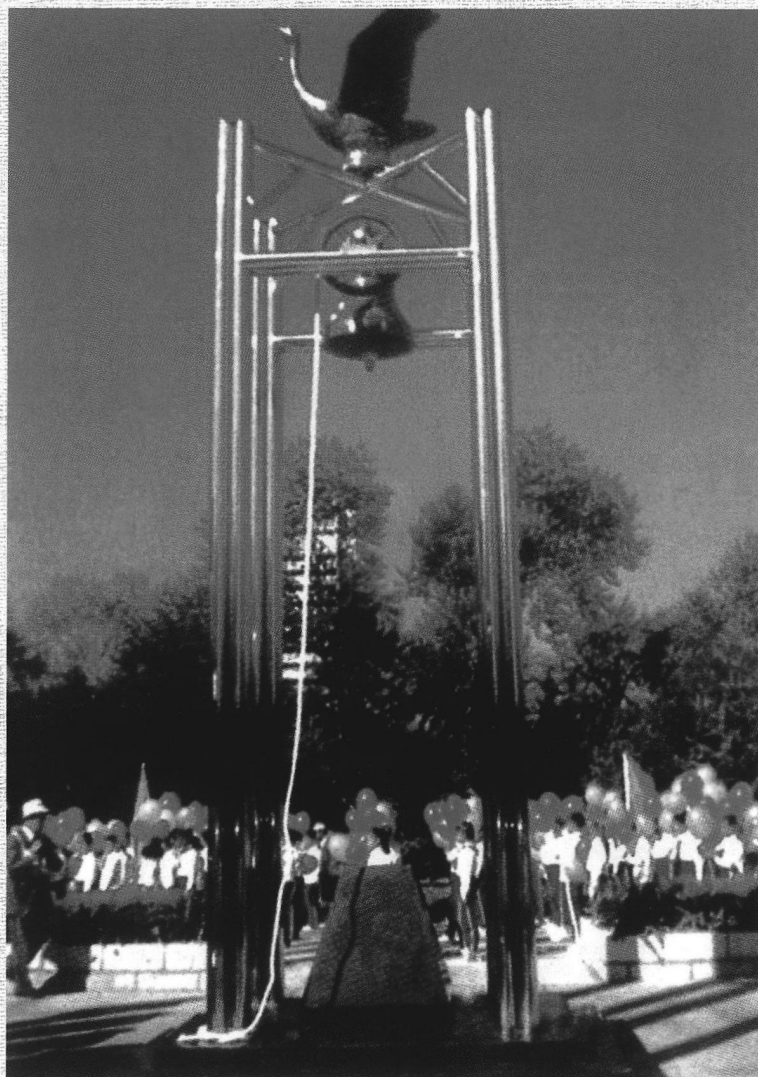
反戦・反核・日ソ友好を祈念し、昭和63年（1988）8月9日、レニングラード市へ寄贈されました。除幕式には日本から安田団長をはじめ122名が出席、地元カリーニン地区から3000名を超える市民が参加し、両国の代表がテープカットを行い、日ソ友好、日ソ不戦を誓い合いました。

なお、当日は長崎市の平和公園において、同時刻に平和集会在開催され、労働者・被爆者・市民が多数参加し、有意義な連帯集会となりました。

レニングラード市は、第2次世界大戦でナチスドイツ軍に900日間も包囲され、60万人市民が戦争の犠牲になり、長崎同様甚大な犠牲を受けた都市です。

贈呈式 1988年8月9日
日本代表団122名（長崎24名）出席





長崎の鐘 第3号

中国・瀋陽市

日本軍が中国侵略を開始した柳条湖事件の地である瀋陽市に寄贈されました。

平成2年（1990年）9月18日、市内の青年公園で除幕式が開催され、当日は長崎から近藤団長をはじめ85名が出席しました。

侵略行為を市民の立場から謝罪するとともに、日中友好、日中不戦の誓いを固め、その後日中の参加者がスクラムを組み、市内をデモ行進し、歴史的な式典となりました。

さらに、瀋陽市のほか北京、上海市を訪問して中国人民との交流を深め、特に北京での人民大会堂における呉学謙副首相との会談や、釣魚台国賓館における大歓迎パーティーは圧巻でした。

贈呈式 1990年9月18日
「中国平和の旅」代表団85名出席



長崎の鐘 第4号

ハワイ・ホノルル市

日米開戦の発端となり、真珠湾攻撃(1941年)の舞台となったパールハーバーへ。

平成2年(1990年)12月8日(現地12月7日)ホノルル市役所横のシビックセンターで除幕式が開催されました。

長崎から62名の代表が出席、地元からはハワイ州知事をはじめホノルル市の反核市民活動家などが多数参加し、日米親善・世界平和・反核・不戦を誓い合い、成功のうちに終了しました。

“長崎の鐘”は川野団長からファシ市長へ寄贈されました。

贈呈式 1990年12月8日

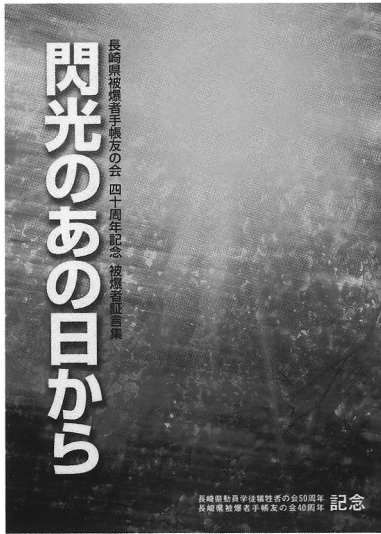
「12・8 反戦の旅」代表団62名出席

世界へ鳴りひびけ 長崎の鐘の音を
平和の祈りをこめて

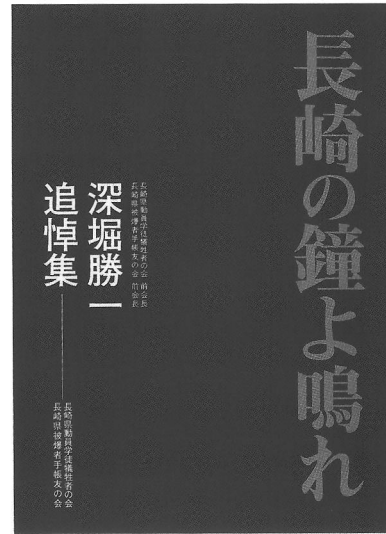


記憶を正しく記録し伝える。

被爆体験を風化させてはならない思いで、これまでに残した記録集



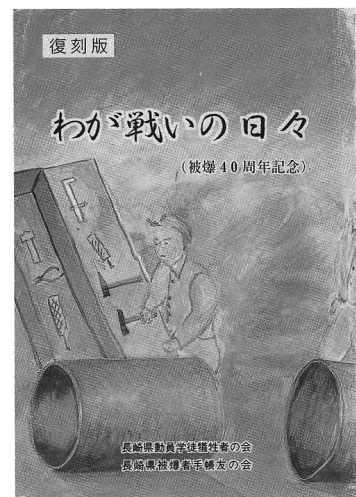
平成20年 6月18日発行



平成19年 2月 4日発行



平成9年 6月 1日発行



昭和60年 8月 8日発行 復刻版

被爆・戦後70年を迎えるにあたり

「過去から未来への継承」をテーマに座談会を開催しました。被爆者として、被爆二世として、未来を生きる高校生の方にも参加していただき、現在の思いを語っていただき、本書に記録することになりました。



平成27年2月8日



平成27年5月19日



発刊にあたり

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会
会長 井原 東洋一

〈二発の原子爆弾〉

人類史上最初の原子爆弾は、一九四五年（昭和二十年）八月六日午前八時十五分、広島上空で炸裂した、ウラン二三五を核分裂物質として装備した「リトルボーイ」（少年）によるものでした。

地上五八〇メートルの上空で、目がくらむ閃光を放って炸裂した火球の中心温度は、摂氏一〇〇万度を超え、爆心地周辺の地表温度は、三〇〇度から四〇〇度にも達したと推定されています。

爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方八方へ放射され、周囲の空気を膨張させて超高压の爆風となり、これら三つの複雑な作用によって、瞬時に、無差別に大量破壊と大量殺りくが引き起こされました。

当時三十五万人の人々がいたと考えられる広島では、住民、軍関係者、建設や疎開作業に動員されていた周辺住民のほかに、当時植民地だった朝鮮・台湾や中国大陸からの人々も多数で、その中には、強制的に徴用された人々や中国・東南アジアからの留学生、アメリカ軍捕虜なども含まれており、その年の十二月末までに、約十四万人が死亡したと記録されています。

人類殺りくと都市破壊のために、実際に原子爆弾が使用されたのは、二発で、その二発目が長崎でした。

しかし、一九四五年（昭和二十年）八月九日、午前十一時〇二分に、長崎の浦上空五〇三メートルで炸裂した原子爆弾は、プルトニウムを核分裂物質として使用した「ファット・マン」（太った男）と呼ばれるもので、

TNT火薬換算で二万一千トンとされ、広島型より、一・四倍もの破壊力を有するものでした。

何ゆえに、種類が異なる二つの原爆を投下したのか正確には解りませんが、私は、明らかな人体実験ではなかったのかと思っています。

周囲が山に囲まれた長崎では、それでも、その年の十二月末までに、七万四千人が死亡し、七万五千人が傷つきました。都市の全面的な破壊は言うに及びません。

原子爆弾の脅威は、さらに放射線被害による遺伝的後障害と晩発的障害発生への恐怖であります。

人間のみならず、命あるものすべてを、無差別に殺傷し、環境を破壊し尽くし、精神的、社会的な苦難を永続させる悪魔の兵器であります。

〈立ちあがりはじめた被爆者〉

その様な国際法違反の兵器が使用され、その耐え難き苦難の中に生き抜いた被爆者たちは、はじめは、放心の中になすすべを知りませんでした。自らの心身に刻まれた苦悩から立ちあがって国家補償による援護を求め、再び原爆を使わせてはならないとの意志結集をはじめました。

医療費や健康管理の為の各種制度の確立と改定、被爆地域の是正、子や孫の世代への配慮など、自らの力の不足を、被爆者同志の連携や政治勢力、民主的平和的団体などの支援と協力の中で、徐々に改善が図られる様、努力を重ねて来ました。

ようやくにして、恒久法の被爆者援護法も制定されましたが、未だ不十分で、それからすでに二十年が経ちました。

〈七〇年の節目、平和に逆行の危惧〉

被爆七〇年は、被爆者の平均年齢が八〇歳に達し、念願の核兵器廃絶は、更に遠のいたどころか、三たび核兵器使用の危惧が高まっている様に思われてなりません。

米国のオバマ大統領がプラハで声明した「核なき世界実現」へのメッセージが空虚なものとなり、遂に日本でも、安倍政権によって「集団的自衛権行使容認」の法制整備が、日本国憲法の平和規範を無視して進められ、「戦争する国づくり」に逆行しはじめています。二〇一五年のNPT再検討会議は「核兵器禁止を条約化しようとする非核兵器保有国の幅広い結集」をせせら笑うかのように、五大核保有国と「核の傘」の中にいる日本国などの非協力によって、合意が葬られ、成果を生みだす事ができませんでした。

二発の原子爆弾による苦しみと惨禍を訴え続けても、なお一万六千余発の原子爆弾が保有され、日本においては「核の傘」の中にいながら核兵器廃絶を空叫びする矛盾をかかえたまま、「潜在的核抑止力」としての「原子力発電所再稼働」が推進されるなど、まさに負の節目の被爆七〇年、戦後七〇年を迎えています。

〈核兵器禁止をめざす被爆者はたじろがない〉

しかし、私たち被爆者は、決して落胆せずたじろがず、「核兵器廃絶」、「核も戦争もない地球を子どもたちの為に!」、「長崎を最後の被爆地に!」との思いを忘れず、さらに、過去の加害責任を認識して「過去から未来への継承」を確かなものにする責任を負っています。

私たちが生きてきた忌わしい過去の体験を無にせず、世界の恒久平和を創造する為には、正しい認識を有する二世や三世に継承する以外に道はありません。

長崎県被爆者手帳友の会は、平和な世界の実現に、ひたすら活動する子や孫の世代を信じ、被爆七〇年の節目にこの記念誌を編纂しました。

苦難の道は、先人たちの努力により切り拓られて来ましたが、未完成であります。

希望への道は、国際的な感覚と知性をもつ次世代の皆さんが、眞理による協調の中からきつと逆戻りしない大道に築き上げてくれるでしょう。

目次

発刊にあたり……………

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会

会長 井原 東洋一

序章 被爆体験を詠む

1

第1章 未来へ 高校生との座談会

9

第2章 座談会 被爆二世の時代―いま継承すべきこと―

45

第3章 被爆証言集

71

原爆で亡くなったあなたへ……………嘉松愛子 72

長崎の声 Message from Nagasaki……………高井良明 74

原爆の思い出……………高平弘 75

平和を願う……………木下トヨ 81

被爆体験……………浦辺弘子 83

朝日新聞 ナガサキノート

毎月9日 鐘の音響かせ……………井原東洋一 86

被爆者を思い朝晩祈る……………中村キクヨ 99

長崎新聞 わたしの被爆ノート 忘れぬあの日より掲載

みな口々に「水欲しい」……………坊上 テイ 122

走る格好で息絶えた人……………川副 政子 124

燃える町見るしかなく……………川口 与作 125

やせ細る母 看病むなしく……………土橋 信子 127

水求める声 応えられず……………網田 久江 128

焼け野原の街にがくせん……………山岡 光子 130

閃光走り熱風全身に……………河辺 総子 131

『がまだせ』と励ます……………田崎 浩 133

異臭が唯一の「記憶」……………中村 雪和 134

教室はまるで生き地獄……………平田 弘 136

安倍氏再登板 9条心配……………井黒キヨミ 109

亡き友人を思い 水供養……………早崎猪之助 116

兄と再会 抱き合い涙……………木場七之助 137

今も体内にガラス片……………岡山 クマ 139

元軍医の父を手伝う……………羽田 恵美 140

海に飛ばされ命拾い……………神田 源隆 142

ぶくぶくと動く死体……………西田 ソワ 143

うじ虫をはしで取る……………川内 フミ 145

弟の骨割り「ごめんね」……………山口 榮子 146

最期まで妻捜す男性……………中島 タエ 148

水望む声 応えられず……………中浦 努 149

飲めば死ぬ でもよか……………井村 泰 151

第4章 活動の記録

人の優しさ身に染みた……………	武末 昭夫	152	焼け野原にがくぜん……………	松永ツル子	161
神学校裏に同級生埋葬……………	中田 喜藏	154	諫早目指し線路歩いた……………	吉川 湊子	163
差別が嫌で黙っていた……………	内野チヨノ	155	死体とうめき声の駅舎……………	朝長昭一郎	164
焼け野原でレール修復……………	石井 民治	157	炎の夜空 ただ眺めた……………	嘉松 愛子	166
無言で立ち尽くす少女……………	酒井 武	158	命拾いした「技術ビル」地球が爆発したんだ」		
夜更けても空明るく……………	岩間 涼	160	……………	早崎猪之助	167

(1) 被爆・戦後70年の歴史と友の会活動記録	170
(2) 近年の友の会活動詳細	193

序章

被爆体験を詠む

あの子らも囲む原爆忌のオルガン

嘉松 愛子

八月が近づき原爆忌俳句の宿題が気がかりだった或る日、ふと耳にしたオルガンという言葉、私には思いがけないヒントでした。保育園から教会まで馴れ親しんだオルガンのおだやかな音律、それに和す美しい歌声、あの日一瞬にして天国へ逝った子供達もこの輪の中にいたのしいひとときを過しているのでは、との思いと平和を願うての句です。

十一時二分の鐘を撞きにゆく

毎月九日は十一時二分原子爆弾が炸裂した、あの一瞬を今日も思い新たに犠牲者の御冥福と世界平和を祈念し被爆者手帳友の会が行っている月例行事です。

原爆忌足踏みミシン元気です

戦前戦後を共に生きぬいてきたミシン。子供の服も全部このミシンのおかげ。今では骨董品のようなミシンまだまだ元気です。それを踏む私も共に元気です。

断層の上にくらして雛の灯

いつ大地震がくるかわからない日本列島、すでに罹災されている方々。でも心の古里である雛人形には幼い頃にかえる懐かしいひとときを覚えます。

原爆エレジー

本村チヨ子

叫べどもなお隔たりぬ平和への願いに遠き核廃止論

二〇〇七年私は己が被爆者であることを公表した。弟が六十歳にして白血病を発症突然逝ったからである。いつ襲ってくるかも分らぬ原爆後遺症、弟の死をきっかけに核廃運動をしなければと決意した。

辛きこと如何に身周り多くとも娘に原爆の荒野踏ませじ

被爆より間もなく七十年を迎える。一九四五年八月九日、十六歳のY子姉ちゃんは火傷を負い額を怪我し裸足で夜中に我が家に着いた。その後二日間苦しみ逝った。戦争はまだ終っていなかった。

保有国の驕れるままにくり返す核実験に沸きくる怒り

被爆直後の悲惨、そして貧しかった戦後、語る人も語らぬ人もそれぞれに「語り尽せない」苦しいドラマを抱えて生きて来た。静かに怒りを抱えて……それが今を生きる被爆者だ！と思っっている。

長崎の平和の鐘よ永遠に鳴れ

井黒キヨミ

毎月九日十一時二分祈念堂のチャイムに合わせて平和を祈りつつ観光客も一緒に鳴らす長崎の鐘いついまでも鳴らしつづけてほしい!!

水くれと今だきこえる耳の底

原爆落下二日目救護所でムシロに寝かされていた男女の区別もつかない様な黒こげの人々身動きすら出来ない状態で必死に水を求めていた声や悲惨な状景、七十年すぎる今も忘れることは出来ない。

鶴折りをしてるや友は浄土でも

鶴の折り方教えてと云われ教え、少しマヒした指で一心に折り核廃絶平和を願い祈りつゝ千羽鶴ダイケアで皆と一緒に折れるようになったと喜んでいた友。同じ病院で働き一緒に救護にたずさわった、私の生証人みたいな人だったのに昨年十月逝ってしまいました。

浦上に探す骨片蟻の列

松尾すみ子

改憲あるな老婆は十葉干している

黒い雨背負いつづけるかたつむり

二十年八月九日、一発の爆弾の閃光に気絶した。浦上の惨劇も放射能のことも知らず二十歳の職場は突如真つ暗となる。その夜から下痢がつづき葉は無し困り果て、母は十葉を煎じて一ヶ月位のませてくれた。母のお陰と思う。兄二人戦争のために命を落としている我が家戦後七十周年を迎えた今、生かされて俳句の御縁を頂いている。生きている限り反核の詩を詠み続けて行かねばと切に思う。

十一時二分蝉時雨は読経なり

鳥井 國臣

私の工場の前には防風林を兼ねた松林が広がっています。毎年のことながら熊蟬のなき声が熱苦しくうるさいけれど親しみを覚えます。今年もまた七十回目あの忌わしい長崎原爆の日がきました。十一時二分の長崎市のサイレンを合図に黙祷をしている耳に時雨の音のような激しい蝉の声が犠牲者の追悼と平和を願う読経のように聞こえます。

園児らの芋堀り戦争はもうしない

終戦は私の五歳のときでした。原爆に焼き出され家族は大変苦労したとのことですが、芋というと私も年代の空腹を満たしてくれた大切な食べ物でした。その頃野母崎は鰯の豊漁のときでしたので芋と鰯でなんとか生きてこられました。戦争は絶対にしてはいけません。国民を決して飢えさせてはいけません政治を願う。

生い立ちや天草灘の吹雪かな

ここ野母崎には天草灘を望む小高い丘に海難殉職者慰霊碑が建立され供養がなされております。戦後まもなく地元の中学校を卒業するや一人前の漁師として一本釣船に乗り組みシナ海まで出漁してゆきました。大きな稼ぎになっていたからです。そして春一番の突風や冬の荒れた海で多くの若者が殉職しました。

原爆忌の八月が近まり俳句の宿題が気がかりだったがあの日の事を思いうかべ俳句を作りました。

田崎 藤八

原子野にちりゆきしともやすらかに

ピカドンにふきとばされしわれいきて

原爆忌散りしあの子らやすらかに

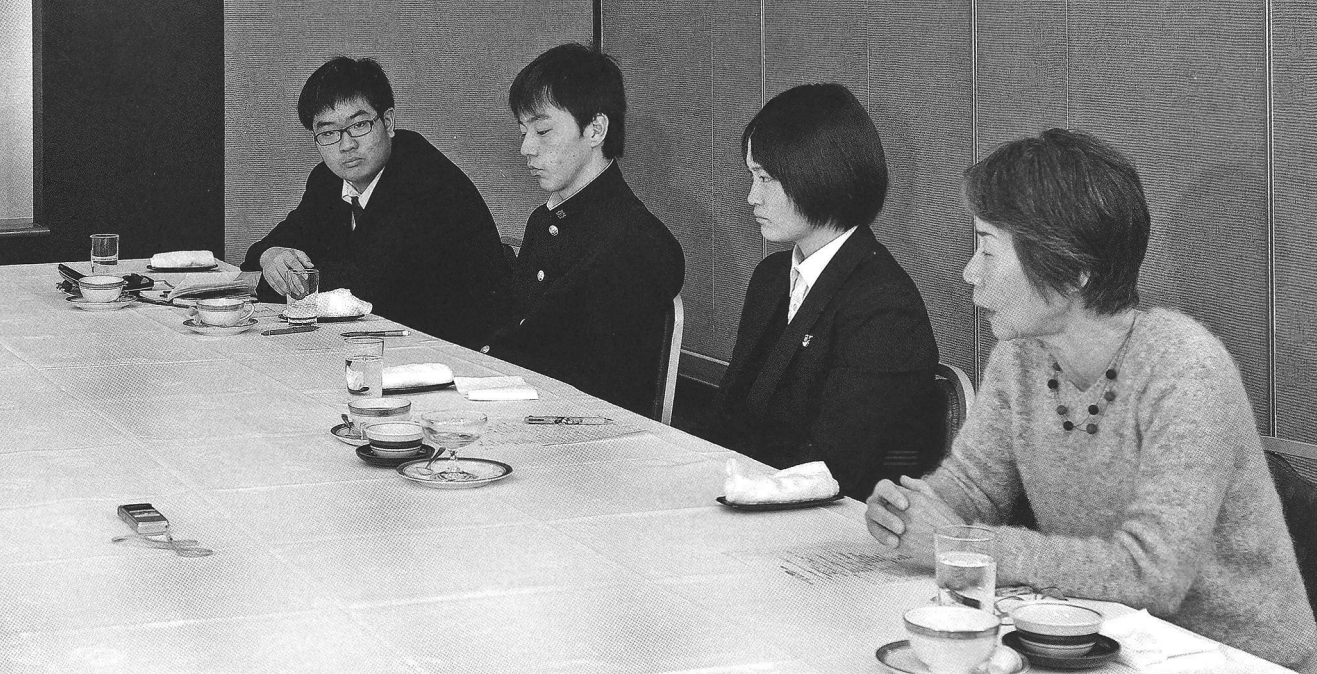
暮れ行く六十九年の夏

早崎猪之助

楽しいな夏休みもせみの泣き声が人の泣き声か
原爆とも知らず多くの人々が世を去る後影

第1章

未来へ 高校生との座談会



未来へ — 高校生との座談会

平和な社会の

継続のために

いま伝え遺したいもの

◎と き 平成27年2月8日

◎ところ ホテルニュー長崎

◎進 行 長崎県被爆者手帳友の会会長 井原東洋一

◎出席者 被爆者 中村キクヨ 上島 富太 井黒キヨミ
(順不同)

高校生 竹内 彩華さん 西田 凌さん 平田 尚文さん

高校生平和大使派遣委員会・被爆二世 阪口 博子さん

(敬称略)



| 井原東洋一



| 中村キクヨ



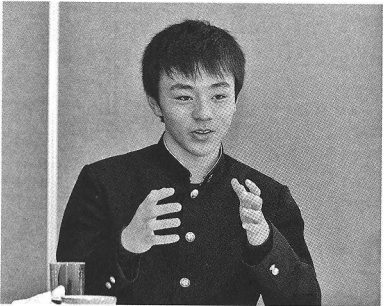
| 上島富太



| 井黒キヨミ



| 阪口博子さん



| 平田尚文さん



| 西田 凌さん



| 竹内彩華さん

井原 ただいまから、高校生平和大使および高校生一人署名活動に従事している皆さんと被爆者との座談会を開催いたします。

まず最初に私の自己紹介をさせていただきます。私は井原東洋一といいます。

1936年（昭和11年）3月9日の生まれですので、来月79歳になります。いま78歳です。名前はトヨカズと言いますけれど「東洋一」と書きます。父が56歳、母が48歳の時に生まれ、いわゆる高齢出産です。すぐ上の兄とは7歳違い、その上の姉、ここに来ております井黒ですけれども、ちょうど10歳違います。

——中略——（本書「朝日新聞ナガサキノート」86～98頁参照）

私が被爆したのは小学校の4年生で、ちょうど9歳でした。外傷もほとんどなく元気に過ごしていました。田舎ですから、虫を追ったり、トンボを釣ったり、川でダクマやハヤを捕ったり、カエルを掴んだり、ハタ揚げをしたりし



井原東洋一

て過ごしました。小学校は昭和23年、戦後改革の第1回の卒業生になります。矢^ヤ上^{ガミ}小学校第1回卒業生です。矢上中学校を経て長崎工業高校を卒業してから九州電力株式会社に入りました。

いま九州電力は原発再稼働などで大変ですが、私は原発には絶対反対しています。なぜかという、被爆者だということ、核と人類は共存できないという

う考えが体の隅々まで行きわたっていますので、原発には反対と言いつづけております。いま世界が非常に流動化し、テロ！、テロ！、テロ！と言われていきますけれど、テロにも原因があるわけです。やはり貧困、差別、弾圧、そういう中で生きている人たちもたくさんいるというわけです。

私たちは一発の原子爆弾のために、長崎で7万4000人の方が殺戮され、7万5000人の方が傷害を受けた。すでに、もう16万人を超える人が原爆死没者名簿に記載されていますが、しかし、ただの1発でこんな被害があるというのに、まだ世界には1万6000余発の原爆があり、い

つ使われるかわからない。だから最後の一発をなくすまで、私たちは原爆を使わない核のない世界をめざして闘っていかなくてはならないと思っています。被爆者ですから、どうしても被害者意識に囚われがちです。しかし、私たちは加害の歴史もきちんと捉えて、その国の人びとと話をする時には、やはり加害の歴史について目をつぶっておくことはできないというふうに思っています。先般亡くなりましたドイツのワイツゼッカー元大統領は、「過去に目をつぶる者は未来に盲目だ」ということを言っておりますが、そのことを日本の国も政治家もかみしめていなくてはならないと思っています。被爆者の援護、あるいは被爆地域の是正、被爆者の認定、あるいは被爆二世、三世というものの苦悩、そういうものを共有しながら、私たち被爆者手帳友の会は、「核も戦争もない地球を、未来の子どもたちに伝えたい」ということをスローガンに頑張っているところで

す。

今日は私たち被爆者手帳友の会役員の皆さんも体験を語り、そして皆さんに聞いていただいて、皆さんの活動の決意、あるいは活動する中でのいろいろな不安、悩み、ある

いは希望、そういうものも語っていただき、私たちの記念誌を飾っていただきたいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず、被爆者の方から証言をお願いします。

上島 私は今、友の会の副会長をしております上島富太と申します。当時、長崎西高の前身である瓊浦中学校の4年生で、三菱兵器大橋工場に動員されました。幸いといっていいかどうか分かりませんが、あの日の2〜3日前から夜勤になりました、ちょうどその頃には朝7時が終わりですから、蛍茶屋ほたるぢやまで電車で帰って、それから我が家まで歩いて帰っておりました。井原会長と同郷の矢上村、現在の矢上町です。その自宅で夜勤あけで寝ておりました。現川うつがわの方角にある部屋で寝ていたのですが、そしたら11時2分、私は寝ていたからわからないのですが、突然障子じざが被さかぶってきて、それでびっくりして飛び起きて表に出てみたら、太陽が真っ黒い雲に覆われて、真っ赤まかく赤かに火の玉のようになってる。うちは百姓で親は畑ですから私は家に一人寝ている。消防団の人が「火の玉のおっちゃげ

よっけん、全員避難せよ」と言いながら、家の前を走っていったことを覚えていません。そういうことで一命をとりとめたわけですけど、その晩は何もわからないまま寝て、翌朝7時頃からどうなっているのかなと兵器工場まで歩いて行きました。矢上には同じ学校の生徒が4〜5人おりましたけど、その人たちとも連絡をとらずに一人で行きました。兵器製作所

は海軍が管理していました。その人たちが生徒がズル休みなどしたら家まで来てそびいて（引き連れて）行っていた。そういうことを聞いていたものだから、どうなっているか不安で翌日朝早く歩いて兵器工場まで行きました。長崎駅前まではどうもなかったのですが、駅を越えたら見渡すかぎり焼け野原。あちこちまだ煙があがっていましたが、何とか行ってみようと思つて、歩いて昔の道を行きました。障害物があつても越えて行きました。行きはそう気にもせずに行つたのですが、ちょうど工場の人と会つて「なんしにきたとか」「はよ帰れ、なんも仕事はなかと」と言われ



上島富太

たので、そのまま引き返すことにしました。現在の太橋電停そばの橋のたもとには、水を飲みに来たまま行きだおれになった死体がゴロゴロと散乱しておりました。そういうことで原爆は体験しております。

私は10人兄弟の4男坊で、兄たち3人は兵隊に行つて、姉と妹二人は家にいたので無事でした。被爆者手帳友の会が設立された当時は、私は近所のお手伝い程度でしたが、近所の人自分がもう年だから代わってくれといわれて、役をしてもう40年ぐらいになります。ということで現在、井原会長のもとで副会長をして、平和大行進部会とか原爆慰霊祭の遺族会とも協力しながら、友の会の手伝いをしているようなわけです。聞きにくかったとは思いますが、どうもありがとうございます。

中村 私は被爆者手帳友の会の仕事を一緒にしております。1924年に生まれまして、現在90歳と半年になります。

話は上手に出来ませんけれども、私はちょうど21歳の時に、現在住んでおります小瀬戸町こせどというところで被爆いたしました。

皆さんご存知ないと思いますけれども小瀬戸は三菱造船所から上の方に一山越えて、それからいま「みなと坂」と呼ばれる新興住宅のちよつと先のところです。私は小学校から高等女学校に進みましたから、船で通学して鶴鳴かくね高等女学校で4年間勉強いたしました。私が4年生になる頃には、ちょうど日独伊三国同盟とかい로운ことがありまして、そういったことが遠くのほうからだんだんと戦争の足音が近づいてくるような感じでした。英語も1ページだけで、今も忘れません「スプリング、スプリング、イットイズスプリング」いわゆる春が来ました春が来ましたという1ページだけで英語も終わったような状態でした。それからだんだんと、戦争色が濃くなりまして、ちょうど卒業した18歳の時に、三菱造船所と同じように軍需工場の川南造船所かわなみというものができまして、軍に納める品物だけを作るような仕事をしておりました。そこでいろいろな捕虜ほりよになった外国の人たちも何人か、最後は何百人になりました

けれども、一緒に仕事はしませんでしたけれども、ときどき見かけるようになりました。そして戦争がいよいよ厳しくなった前後に、私の父が、難しい仕事に就いていないで早く結婚しろと、ほんとに昔は親の言うままの行動でしたので、そのまま19歳何カ月くらいで結婚いたしました。結婚したのは原爆が落ちる1年2カ月ほど前だったですけれども、まだ戦争のたけなわではなかったものの戦争色はだんだん濃くなりまして、そして主人に召集令状がきまして出征しゅつせいいたしました。

私は7カ月から8カ月の身重みおもで、主人が出征したあとは毎日B29の襲来で防空壕ぼうくわうを出たり入ったり毎日の生活でした。そして私には父と母と一緒に住んでくれましたので、ほんとに子どもの面倒は母が見てくれて助かったと思っております。防空壕に出たり入ったりするのも、ほんとに小さな穴のような、民間の私たちが掘って、男手がないものですから隣組とりのぐみの人たちが少しずつ掘った10人も入らない防空壕だったんですけれども、やはり防空壕に入ればなんとなしに安心感がありまして、その防空壕に子どもを母が抱いて入っております。

そしていよいよ8月9日、忘れもしません。空襲警報の解除で外に出た途端に、洗濯物を干しながら、爆風というか大きな爆音とともに、私は吹き飛ばされそのままの状態になっておりました。その時に母が私の生まれた長男を守ってくれまして、おかげさまで怪我はなかったんですけれども、稲佐山いなさやまという一つの山がありましたために、爆風もある程度抑えられて、私たちも無傷のままです。すごかったです。私には思いません。

——中略——（本書「朝日新聞ナガサキノート」99～108頁参照）

戦中戦後の出来事は、70周年を迎えますけれども、私は昨日のことにしか思い出せません。ほんとに戦争というものは、絶対にすべきではないということを、皆さんに声を大にして叫びたいと思います。

そしてその後、私は被爆者という立場で一つの運動をしなくてはならない、被爆者を兵隊と同様、慰霊をしたいと



中村キクコ

いう信念で、被爆の運動を前会長の深堀会長とともに始めました。それは昭和40年頃と思います。それからずっとこの被爆の運動に携わって、被爆者というのが、ほんとにどれだけ苦しんでいるか、そして戦争というものが、どんなにみんなを苦しめるものかということ、平和というものに対して大きな希望を抱くようになりました。そしてその後、ピース

ボートに乗りまして世界23カ国、ほんとにいろいろなところにまわって、語ることに、「世界は一つ」「平和は大いなる事」「核は要らない」そういった言葉をほんとうに聞きました。そして帰ってまたスペインとかトルコとかに、現在の会長と一緒にいきました。そういうことで、私は一人の被爆者として、明日も分からない年齢になりましたけれども、21歳の時に被爆したあの光景をいまだに忘れることができない、そういった気持ちで現在も生きております。また韓国でいつも一緒になる高校生の方たちとともに、高校生の方が平和を一緒に唱えてくださって、そして私たちの

後継をしてくださるということは、被爆者の私としては、こんな力強いことはありません。これから先も、私は時間の許す限り一生懸命やって、少しでも核廃絶とそれから原爆の恐ろしさというものを唱えながら生きていきたいと思ひ思います。やはり私たちが一生懸命平和を語ることによって、それを受け継いでくれる高校生の方々に、ほんとうに私は期待をしております。どうぞ、今後皆さま方の力を貸してください。おねがいします。

井黒 高校生の皆さん、いつもご苦勞様でございます。私は同じ友の会の井黒キヨミと申します。1926年3月18日生まれで88歳11カ月になります。

私は原爆当時、ちょうど11時2分には、桜馬場町さくらばばとして、お諏訪すわさんと螢茶屋の中間あたりの中村病院という小さな医院にいました。

—— 中略 —— (本書「朝日新聞ナガサキノート」109～115頁参照)

今から7～8年前に、ピースポートで初めて被爆証言をしました。その後、土井首どいのかみ中学校から平和学習で体験を話

してくださいと言われたんですよ。私は生徒さんに分かるように話ができるか悩んだのですが、企画した先生がピースポートに行った時の映像など映して応援してくれました。私たちが生きているうちに、戦争の悲惨さや脆もろさ、愚おろかさ、を、若い人たちに分かっていただきたいと、そのために皆さん協力してくださいとお願いしました。後で感想文を頂いたんですけど、少しは伝わったかなと思います。皆さんも平和のために、どうぞ今後もよろしく願ひします。

井原 いま被爆者の方の証言を聞かれて、率直な感想を聞かせてください。

西田 (南山高校) 私は南山なんざん高校1年の西田凌と申します。

いまお話を聞いたんですけど、被爆された歳が私の歳とだいたい同じくらいということで、私は経験してないんですけど、言葉では言い表せない恐ろしい経験というのがあって、これまで小学校の時から学習してきたのですけれど、本当に平和というのは、何が平和なのかまだ自分の中でもよくわからないですけど、今は核兵器の廃絶

ということでは、一人署名活動をやっています。活動中にとどき被爆者の方が来てくださって署名してくださいと心から言われて、頑張ってくださると心から言われて、ほんとにその時はなんとか頑張っていかないとけないなと思いました。

質問をしたいのですが、初めて被爆体験を話したときは、どんな気持ちでいらっしかったですか。

中村 私は本当は語りたくなくて、被爆を口に出してということが怖くて、運動はしていましたが、自分の体験というものはずっと話さなかつたんです。けれども、長崎市主催の平和式典の時に私は被爆者代表で「平和への誓い」を読ませていただきました。それも会長からすすめられて、私は自分の被爆のことを初めて話しましたけれども、それからいろいろな方に質問をされたりすることで、本当に私たちは被爆者で、この体験を隠すことではなくて皆さんに聞いていただくように話す義務があるんだということを、その



西田 凌さん

ことを、ピースボートに乗って被爆者としてニューヨークの国連本部に行った時に、そこで話した時にカワノセツコさんという今はカナダの大学の先生ですけれども、その方と2週間ほど一緒にになりました、その時にその先生から学びました。先生は英語もでき各国の言葉で皆さんとお話をなさるんですね。そんな立派な方と2週間部屋が一緒でした。その方は朝も晩も勉強されて、私は何も勉強しないで、ただ自分の身の回りの整理や、その日にあったことだけを書くという程度だったですけど、その方から叱られたんです。「中村さん、このニューヨークに来て、あさっては

時に初めて知りました。だから被爆して30年ほどは話すということはなかったんですけれど、いまに至って、皆さんに自分の被爆体験を話すようになりました。私が被爆体験を語るなくてはならないというのは、言葉を上手に使おうとかそういう問題ではなくて、自分が思ったことを一生懸命相手の方に伝えたら、相手の方もわかっていただけなのだという

被爆の体験を話さなければならぬ。みんな顔色の違った方、髪の毛の違った方がいらっしやるのに、あなたは何もしないで大丈夫ですか」と先生から言われました。私は「先生、私は何を話したらいいんですか。私は自分の体験を話せということ、ピースボートの川崎先生から言われましたから、いまさら被爆の体験を作っているんなことを言うことはできません。ただ自分の目で見、自分の心に感じたことを言うだけですから」と言ったら、「あ、そう。それなら仕方ないわね」と先生はおっしゃいましたけれども、

その当日になって、私は本当に、自分の体験とか、いろんなことを、自分の見たままにお話をしました。そして皆さんから、ほんとうに良かった、ありのままの被爆者としての目で見たいいろいろなことを話してくださいって良かった、皆さんから言われまして、それから人とお話をするとき、いろいろなと飾った言葉はいらないんだ、自分が思ったことをはっきりと相手方に通じるように話をするのが、私のひとつの役割ということで、そのとき初めて被爆体験の証言ということで勉強いたしました。

平田（長崎西高） 長崎西高校、平田尚文です。僕も長崎に小さい時からいるので、小学校の時から原爆のことは学んでいたんですけども、被爆者の方々から話を聞いたときにさまざまながはつきりするんですけど、何回聞いても、被爆の被害というものが頭の中でイメージができなくて、その時の被爆の状況とかを、ちよつと詳しく教えていただけないでしょうか。被爆当時の長崎の現状というものを教えていただけませんか。

中村 その当時の、直接被爆の様子を見た時の印象というのは、私たちは実体としてそれを見たのですから、それは生涯忘れることはできません。それは被爆者でなければ考えられないことですけれども、皆さんにお話をしてもその何分の一だけしか実感が湧いてこないと思いますけれども、その点、私たち被爆者は、この目で見、この手でいろんなことをしてきた記憶というのは、そう簡単に消せるものはありません。今も鮮明に残っております。

上島 私はさきほど言いましたように、矢上で被爆して翌

日歩いて行ったものですから、長崎駅あたりまでは昔の家は残っていたのですが、長崎駅を越えた途端に一面、何も無い、ほんとうに焼け野原、というのが第一印象です。

平田 木々も何もない？

上島 そうそう、なにもない。

井黒 谷口稜睡さんの背中 of 傷を見ればわかると思いますが、それからいろんな想像をしていただければ、まだ汁が出ているらしいんですね。それで1年に何回か入院されたりしているらしいですよ。

中村 谷口さんはそれでも生きてらっしゃるんですが、当時その場で横たわっている人の姿というのは、顔も目がどこか口がどこかわからないような状態なんです。

井黒 広島の方が言っていました、皮膚がめくれて下がってたらしいですよ。からだを触ったら皮膚がはずれたり

して、とにかく目も当てられない様子でした。

竹内（長崎東高） 長崎東高3年の竹内彩華です。現在、第17代高校生平和大使を務めさせていただいています。4月からは長崎大学に進学することになりました。今日お話を聞いて、広島 of 資料館にも皮膚が爛れた原爆の人形が飾られていて、でもそれが恐ろしすぎて、それを置くのを止めてほしいという意見を言う方もいらっしゃいますけれど、私は被爆の現状というものを実際に自分が小学校の先生になった時に、そのまま恐ろしいものは恐ろしいままで伝えたいなと思っています。私が小学校の先生になる頃には、子どもたちというのは実際に被爆者の方のお話を聞く機会というのが少なくなっていると思うので、今私が被爆者の実際の声を聞ける世代に生まれたからこそ、いま平和のことについていっぱい勉強して未来の子どもたちに伝えていけるような仕事をしたいなと思っています。

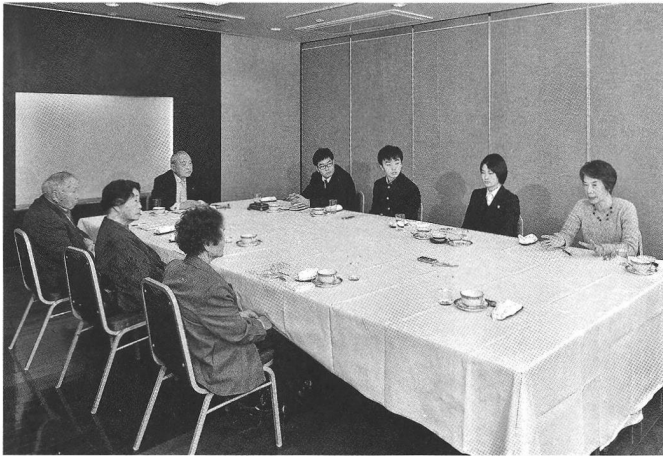
私の方からは二つ質問があるんですけど、実際に戦争を経験した皆さんが考える本当の平和というのは何なのだろうかということと、あと世界が平和になるまではこの高

校生1万人平和署名活動と高校生平和大使という活動はどんどん続いていくと思うんですけど、その中で私たち若い世代に伝えたいこと、残したいことという、二つを質問したいと思います。

上島 一万人署名活動に参加している高校生の皆さんに、

そういう気持ちでやっていただければ、私は被爆者として大変うれしゅうございます。ちょうど皆さんと同世代で、学校も卒業せずに亡くなった人が、同級生にも先輩にも後輩にもいっぱいおります。そういうふうな人たちのためにも、やはり核兵器のない世界、戦争のない世界、それを目標にさせていただいて、高校生1万人署名を継続していただければ幸いです。

井原 高校生の皆さんが、「微力だけど無力じゃない」というスローガンだけ



じゃなくて、実際の活動の中で活かしていただきたい。すでに100万を超える署名を集めている。そして高校生平和大使も今や全国に広がって、320人という若い皆さんが、ニューヨークだけではなくて、そのほかフィリピンとか、あるいはブラジルとか韓国とか、あちこちに活動の場を広げていっておられる。それは国連もちろん知っていますし、世界的にも評価が定着してきていると思います。これは私たちがこれまで出来なかったことを実際にやっていたことになって、やはり何らかの形で伝えていかなければ伝わらない。もちろん文書で伝えることも必要でしょうし、日常の活動を通じて人に伝える。実際実感できますよね、伝えなければ伝わらない。沈黙しては伝わらない。そういうことからすると、私たち被爆者にとっても次の世代がきちんと平和を伝えていくという使命をもってやっていることは私たちの光明ともいえるのです。

戦争というのはいったいどこから来るのか。先程もちょっと触れましたけれども、やはり貧困の連鎖、差別、あるいは人権を侵されている。こういういろんなものがあると思います。これまで平和だった家庭が、例えば働き手が倒れると、あるいは会社をクビになると、そういうときに何が訪れるかというと貧困と苦悩でしょう。これは平和を壊すものですね。ですからできるだけ共に手を繋ぎあっていけるということが重要だと思っております。

隣近所ともそうですし、近隣諸国ともそうですけれど、やはり過去を認識し反省し、あるいは償い、そして仲良くしていくということを心がけておかなければならないと思います。その点では皆さんも各地を回られていたりしていますから、あちこちの国の皆さんとの交流もありますし、とくに韓国との皆さんとは何回も交流されていますから、そういう体験を語っていただけたらなと思います。



竹内彩華さん

平田（長崎西高）僕は去年の4月からなので、まだ外国には行っていませんので、今回の韓国は行きたいと思います。

竹内（長崎東高）私は1年生の時に井原さんと一緒に韓国を訪問させていただいたんですけども、日本の平和教育というのは、被害の場合しか学ぶことがなくて、教科書にも日本の被害の様子とかしか書かれていないのですが、実際に韓国の方々からお話を聞いて、またキム・ムンソンさんに実際に足の怪我を見せてもらった時に、その方々は日本にいなかったら戦争に遭っていなかったし韓国に戻ってからも差別の繰り返しで、今でも裁判などで闘っておられる方もいて、そういう三重の苦しみを味わっている韓国の方たちの存在を知りました。その戦争、原爆で苦しんでいるのは日本人だけではなくて海外にもいるんだと思って、それを世界に伝えたいなど思ったのが、平和大使に応募したきっかけなんです。日本の過去に犯した加害の面というのもしっかりと伝えな

がら、平和というものを訴え、伝えていきたいなと思いましたが、

井黒 被爆者同士というのは、相通じるものがあるんですね。韓国に行っても「ああ、元気でしたね」と言ってお互いに励まし合うんですよ。

井原 阪口さんはたくさんの高校生たちを引率されて海外での経験も……

阪口 三人の皆さん、今日は本当にありがとうございます。貴重な体験を聞かせていただいて、今もその時のことを思い出されて感情が出てこられるというのは、それほどやはり辛い経験をされてるなど、私は心に響きましたし、この体験を体験していない者にどう伝えるかということは、ほんとうに大変なことだなというふうに改めて思いました。

平田くんなんか、なかなかイメージができないという話をしたと思いますけれども、それは本人の話を聞く事、そしてその中から自分で疑問を抱いたことを質問をして、

そしてその中でイメージを膨らませるというのは、ほんとうに大事なことだなと思います。井原さんもおっしゃいましたように、やはり好奇心、言い方はちょっと違うんですけども、私もピースポートでもお話をさせていただいたし、ニューヨークの高校生、ほんとうに貧困の中にあるラムの高校とか、またメキシコの高校とかで話をしたんですけれども、被爆の体験というのは、それぞれが強烈な体験なんです。それを聞いた子どもたちは、やはり感動するんですよ。生の話を聞くということの重さ、本当にいろいろな質問をしてくるんです。いまでも放射能は残っているのか、今も体は痛いのかとか、ほんとうに一生懸命に聞いてくるんですね。その話を、やはり私は被爆二世だから体験はしていないけれど、母の体験をなんとか伝えて、被爆者が本当にいなくなったらその体験を伝えられるのは、私たち2世、3世、その志を継ぐ若い人たちだと思えます。皆さんの話を聞いた時に、私にはできる方法が何かあるはずだと、話を聞いてくれる高校生たちの目の輝きを見たときに、やはり自分はこの活動をしなければならぬと思う

し、その活動を受け止める若い世代、その世代を育てるのが、私たち2世の役割だなということで、あらためて高校生に話をすれば返ってくる大きさ、そういうものを大切にしたいなというふうに思っています。

だから三人のお話を聞いて、それぞれ受け止め方も違うし、被爆者の体験も違うけど、何か一つ心に残って、何か心に残ったことが、後から絶対に自分の生き方の中に伝わるだろうというふうに今日も思いました。言葉は、さきほどカワノセツコさんのお話がありました。私も母の体験を私にしか語れない、私が母の体験をどうやって伝えようかということ工夫をしながら、そしていろんな本を読みながら、いろんな本は出ているわけですからそれを自分のものとしながら伝えていくことは大切だなというふうに思いました。皆さんがそれを伝えようとしている姿が、世界の指導者を動かすし、被爆体験というのはそれだけ重みのある事実だと思いますので、ぜひ皆さんに長生きしていただいて、今伝えられる言葉で伝えていただきたいなと思いますし、それを受け止める私たちも一生懸命受け止めたいなと思いました。ほんとうに貴重な体験ありがとうございます

ました。

井原 戦争が起こるのには、当然なんらかの原因があるわけです。宗教、いま「イスラム国」というのが話題になっていますが、8割がイスラム教であるトルコに行ったことがあります。皆さんも行かれたと思いますが、トルコでは「スラムとは平和」であるということで、今の「イスラム国」について多くのイスラム人たちは拒絶感を持っているわけです。私たちが信じている宗教は平和ですね。だから最近では「イスラム国」という表現を報道も政府も使っていないようですけれども、あのような形になってくると標的は「イスラム国」というところに絞られますけれども、それには原因があるということも知っておかなければならないと思います。平和を脅かすものの中に、貧困と差別、あるいは人権の無視、ネグレクト、そういういろんなものが関与しています。あるいは歴史の発展の中で物を作りすぎる、売れない、そういう中で戦争も起こると思っております。過去に日本もそういうことがありました。資源も独占がありました。そういうことも戦争の原因になって

おります。そういうことについて、やはりその根本をよく見極めてやらなければならないと思います。

核兵器が廃絶できるかできないかという議論がよくありますけれど、私たちは廃絶できると思っています。人間が作り出したものですから、人間の手でこれは廃絶できるはずだ。もしなければならぬと思っています。ただ通常兵器と核兵器の違い、発電所を見ましても火力発電所と原子力発電所の違い、それは放射線という特殊性です。次世代、次世代にまで及ぶような晩発的な後遺障害、そういうものが含まれているということです。だから被爆者と同じ戦争被害者であっても、被爆者という戦争被害者の場合は特別に擁護されているわけですね。それでもその中にも矛盾があるわけです。戦争はしてはならない、特に核兵器を使つての戦争、この究極の兵器を使つての戦争は、国際的にもこれはもつとも大きな罪悪なのです。世界の風潮が核兵器をなくそうという方向に向かっていますが、一部の、あるいは核兵器を持つている七つの国々と事実上保有している二つの国やその「核の傘」の中にある国々は、なかなか世界の潮流に乗ろうとしない。そういう意味では今

年1月から5月にかけて開催されるNPT検討会議というのは非常に重要な意味をもつものではないかと思つています。広島と長崎は核兵器の被害を受けた特別な都市です。

実験はたくさんされているんですけど、都市を標的にして無差別殺戮を受けた都市は広島と長崎だけです。そこに住む私たち被爆者、そこに住む高校生の皆さん、やはりこれは文字どおり平和の発信地、平和の発信力にならなければならぬというふうに思っています。自然環境が破壊される、生活環境が破壊されるということについては、心して連帯して、そういうことにならないようにお互いに力を合わせていかなければならないという訳です。私たち被爆者も70年経つと80年はないという人もいます。しかしその被害はずっと残り続けるわけです。80年、90年経つても、おそらく消えないでしょう。いまようやく放射線影響研究も若くして被爆した人たちについて、がんの発症率が一般の人たちに比べて相当高いということを発表しました。また朝長万左男先生たちも研究されておりますけれども、60年経つた後でも傷付いている遺伝子がいろんな病気を併発するというのが発表されております。福島原発事

故から4年。さて若い人たち36万人が検診を受けたそうですけれども、がんを発症したり手術したりした人が70〜80人も出ていますが、これを原発の影響ではないというふうに言い続けている医者もいます。しかしそれは明らかに嘘だと思えます。やはり今後重要な問題点が生じて来るだろうと考えた時に、核というものに頼る社会はおかしいというふうに思います。被爆二世の運動をしている人たちに對して、政府は「あなた方はレントゲン検査を受けるでしょう、レントゲンも放射線じゃないですか」といって被爆二世の動きを退けようとする。普段努力をしている人たちが主権者ですから、そういうことについてはきちんと私たちは主張しなければならぬと思います。

この長崎においてさへ加害の歴史に目を向けようとしません。例えば、私も役員をしていますけれども、西坂の二十六聖人記念館の裏に「岡まさはる記念長崎平和資料館」があります。行かれたことありますか？ これは長崎の地に載っていません。載せないのです。市長に何回も「載せろ」と市議会でも言っても載せない。なぜか。加害の様子を伝えているからです。日本の加害の歴史を知って伝えな

ければ被害だけでは世界の人々に通じない。高校生平和大使あるいは1万人署名活動の皆さん、非常に大きな社会的な責任とともに、期待をしておりますので、そういう期待に応えて、文字どおり長崎を平和の発信地にしようと、その平和の発信地にいるのは自分だという志を固めて、今後も頑張っていたきたいなと思っております。私たちも力の続く限り、核も戦争もない平和な社会、地球を、次の世代に残そうということで頑張っていけますので、世代を超えた協力をしてまいりましょう。

他に質問し足りないところがあつたら申し出てください。あるいは自分の決意もひとつお聞かせください。

西田（南山高校） さきほどから加害の方にも目を向けるということ、日本が第二次世界大戦をおこなったのは世界恐慌が起こつて日本は経済的にも危うくなって、資源がない国なので下の方に攻めていったんです。そこでアメリカにも勝てるんじゃないかということでアメリカにも攻撃をすけて、それでアメリカと全面的な戦争になったわけですけど、明らかに戦争が始まった原因というか貧困というか

経済的などこんなですけれど、それで日本が最初に攻撃をしてしまった、そして韓国や中国で日本は大量に虐殺をしているということ、日本も加害というのがあるというの
は本当にそうだと思います。私も小学校の時は、ずっと被害者と思っていました。その後、中学、高校と世界の歴史

を学んでいく中で、日本も悪いということがわかりました。それでいま私が思っていることは、日本もアメリカも、いまテロが起こっていますが、例えばアルカイダというテロ組織ですが、これはもともと難民の救助をする団体だったんですが、それがなぜテロ組織になったかというと、アメリカが少し関係しているのですが、日本もアメリカもテロを弾圧しなければならぬというんですけど、そのテロ組織をつくった原因というのはアメリカであり日本でもあるんです。だから日本とアメリカは被害者の面ではなく加害者の面で謝らなくてはならないと思



ます。誤って償いをする。その償いというのは、日本や広島、長崎は核兵器を使つてはいけない禁止しなくてはいけないということが、私たちの償いだと思います。私が今どういう思いで活動しているのかというと、やはり償いであるという思いで活動しています。だから平和大使になりたい

なんですけれど、なつたら世界に日本は悪いことをしたということで、ちゃんと謝つて、だから償いとして核兵器を無くしていかないといけないということを世界に伝えたいと思います。

平田（長崎西高） 僕も同じような思いを持っています。将来は科学の研究者になりたいと思つています。だからきつとこの核という問題は避けて通れないみたいだから、物理学などそういう観点から核兵器という問題を考えられる科学者になりたいと思います。

竹内（長崎東高） 高校生1万人署名活動を3年間やってきて、あと1カ月で引退するんですけど、この活動はこれからも続いていくと思うし、この活動をおして平和大使をして国連でスピーチをさせていただいたというのも大きな機会だったんですけども、この活動で多くの被爆者の方とも知り合い、海外の方とも交流する機会が多くて、ほんとうに自分の中でも成長できたと思うし、多くのことが学べたと思います。でもまだまだ学び足りてないところも多いと思うので、将来子どもたちに伝える立場になった時に、正しいことを正しいままに伝えたり、またほんとうに平和について伝えるためにはもっと学ばないと思うので、これからも、長崎大学ですごく平和活動が盛んな大学です。ので、しっかりとこれから学んで立派な先生になりたいと思っています。

井原 いま非常に大きな課題は、被爆者手帳友の会が積極的に取り組むべきもつとも大きな問題、被爆二世の問題です。市長ともお話をしまして、「まず調査をしたらどうですか、長崎市独自に出来るでしょう」というようなことも

申し上げましたけれども、国が、国が、国が……というところで、調査する意思はないようです。私たち被爆者手帳友の会が調査した資料はあります。6万数千人に及ぶ資料ですが、しかし正確な数字はまだ掴めてないですね。しかもようやく検診ができるようになったんですが、がん検診は認められていない状況です。私たちは被爆二世の会を組織の中につくっていますけれど、いくつかの二世の会がありますが、一昨日二世の会の代表も集まりましたので、いろいろな取り組み方の違いもあってもいい、しかし二世として共通部分があることを互いに連帯し合うということを、是非してもらいたいと被災協の二世の会事務局長の柿田代表とも話をしました。ですから二世の会の皆さんも被爆者の皆さんもそうですが、まさにゼロからのスタートをしてきたわけです。これは戦中、戦後、戦争中は言論統制や思想統制もありましたけれども、戦後は長いあいだアメリカの占領下でもありましたし、原爆の実情について語ることができませんでした。調査や資料館などの施設は開設されていましたが、昭和29年にビキニで第五福竜丸事件が起こって初めて被爆という恐怖感が世間に実際に明るみに出

たわけです。しかし、あの時に出漁していた船舶は1000隻を超えていたそうですが、第五福竜丸だけが被災したというかたちに今まではなっていました。亡くなった久保山愛吉さんらたくさんの人たちが被爆の苦しみの中にあつたわけです。今もあるわけです。しかしこれは、日本とアメリカの話によって封じ込められてしまいました。被爆者の扱いをされていませんでした。ようやく全国に被爆者の運動が顕在化してきて、昭和三十二年四月に「原爆被爆者医療法」が施行されました。いま、診断や医療を無料で受けられたり、手当をもらったりしていますけれども、もちろんこれは健康保険に入っていないわけではできませんが、こういう運動には歴史があるわけです。私たち被爆者手帳友の会も、なんと181回上京しています。ゼロからスタートして、いまに至っているわけです。被爆者や二世の皆さんも、いつも言っているんですけれど自らの行動を重ねなくてはだめなんだという訳です。この二世の問題に具体的に顕在化させるきっかけを、中村キクヨさんが「平和への誓い」で、

どうしようか、どうしようかと言っておられました。その中で自分の体験を語られたわけです。その時の思いとい

うのは大変だったと思いますけれど、二世問題を非常に重視する方向に向かつていくことに大きな役割を果たしたんだと思いますので、そこらへんのことを切ない話ですけれど、話していただけたら……。

中村 私の息子が55歳で白血病で亡くなったんです。息子が入院した時に病院の先生から「中村さん、お母さんは被爆なさったんですね。親子の因果関係があるんですよ。あなたのおっぱいを飲ませたために、たぶんヒロシさんは白血病になったと思います」と言われたんですね。私は絶対そういうことはないということではじめは振る舞ってましたけれども、家族も崩壊し、お嫁さんもお母さんが飲ませたおっぱいでヒロシさんがこんな病気になったということ、で、本当に嫁からも私は冷たい目ですつと見られました。そのことは絶対人には話すまいと、こんな病気が親から子に伝わるといことはありえないけれども、やはり現実的にはあるんだということ、でも私はこれだけは被爆者にとっては大きなことになるからと思って誰にも言わず、ただ身内の者だけが知っていたんですけれど、私に「平和へ

の誓い」を言うようにと井原会長からの言葉がありましたので、さきほどお話ししたように学生さんのことか自分が被爆したことをかを文に書いて会長に一応お見せしました。そしたら井原さんが、これでもいいけど何かほかにないかなとおっしゃったときに、私の中で息子のことを言おうか言うまいか格闘しましたけれども、やはりこのことだけは隠していたけれども、いつかだれか私と同じ境遇の方もいるかも知れないということで、意を決してそれを書きました。そして会長もこれでいいということで、「平和への誓い」を読ませていただきました。そしたらその反響がとてもしっかりとびつくりするほど、電話がかかり、「中村さんの『平和への誓い』で読まれた子どもさんの二世のことに對しても関心があります。よく発言してください」という方や、市役所に「中村さんの住所がわかったらこれをやってください。わからなかったら破棄してください」というような手紙がきました。二世の間でも、みんながみんなといわれませんが、こういった大きな問題が出てくるということを実感しまして、それから二世の方に対して、体だけは大事に、でもやはり原爆の放射能というのはこんな

に強い影響があるんですよということを、私は言い続けてきました。ニューヨークでもカワノセツコさんは絶対に親子の関係はないとおっしゃるんですが、でも私は言いました。私は大学の先生のお話を聞きましたけれど、10人聞いたうちで5人の先生は親子因果関係はないとおっしゃる。あとの5人は、関係ある、あるかもしれないとおっしゃる。それで絶対はないということは言われません。そういったことで船の中でも皆さんにお話しました。そういうふうなことで、やはり二世の方も、三世の方も、ずっと放射能の影響は続くんですから、そのためには戦争をしない、そして核兵器を廃絶するということが最後はつながっていくんですね。

私は今も息子が55歳で亡くなって申し訳なかったという気持ちで、毎日を送っております。

井原 被爆の体験、あるいは平和への願い、そういうものについては語っても語っても語り尽くせない。また任務も重い。たくさん抱えきれないほど負担を持っているわけです。今日、被爆者と高校生平和大使、あるいは1万人署名

活動の代表の皆さんと話すことによつて、私たち自身にとつてもおおきな励みとなりました。こういう運動に携わっている高校生の皆さんの運動というものは、被爆都市長崎から見ると大きな誇りだと思つています。強く今日また感じました。

皆さんの活動の裏には、皆さんの両親、祖父母、兄弟、まわりにはサポーターの方もいらつしやいますし、そういう力強い支えがあつてはじめて自分たちもそういう活動ができているといふ感謝の気持ちをおれないうようにしていただきたいなと思ひます。自分が受け持つてゐる重たい荷物だと思ひます。しかしそういう負荷にも負けないで、自分こそは世界平和の推進力の一つだと考へて、よろしく前進していただきたいと思ひます。そのことを次世代、次々世代の皆さんに期待してゐるわけです。どうかひとつそういう期待にこたへて、今後とも力を貸してください。

阪口さんはサポーターとして世界を回つてきて、最近のメキシコのことでも大切な活動だと思ひますが、私たちも平和の鐘を送り続けてきた団体として、今までサンクトペテルブルク、^{シエンヤン}瀋陽、ハワイ、そしてメキシコへと広がつて

きましたが、そういうところの状況を話していただければと思ひます。

阪口 私は昨年2月の核兵器の非人道性に関する第2回国際会議に、高校生平和大使の小柳雅樹さん、それから広島の小桜智穂さんという平和大使二人を連れて参加をさせていただきました。そのなかの一人の小柳雅樹さんが、初めて国際会議の中で設定をされた被爆者セッションの中の、4人の被爆者と1人の被爆三世というこゝで話をする機会をいただきました。その場に私も居合せたんですけれども、先程も言ひましたように、ほんとうに被爆者の話といふのは、核兵器の非人道性にいまものすごく焦点が当たつてゐる中で、核兵器をなくすためには非人道性に焦点を当てていこうという世界の大きな流れの中で、被爆者の話は世界の指導者にほんとうに大きな衝撃を与えて、なんとしても今から新しい条約を作るステップに入つたんだとメキシコの副大統領が言われて、新しい一歩を踏み出したんです。それを受けて今年のウィーン会議も昨年の12月にあったんですけれども、何日か前にピースポートの川崎哲さん

にその時の話を聞かせていただいて、やはり核兵器廃絶というのは条約としてステップを踏もうという新しい段階に入っているという話を聞いたんです。それはオーストリアであったんですけれど、「オーストリアの誓」ということで、核兵器廃絶のためのステップづくりをやる、そのために世界の各国を巻き込んでいこう、それを被爆70周年にむけてやると、

その時に述べられたんですけれども、その後、国連に加盟している190カ国くらいの国々に全部、「オーストリアの誓」を送って、このことについてあなた方は賛同しますか、それを2015年4月、今度のNPT再検討会議までの間に返事を下さいという問い掛けをされているというお話を聞いたんです。そしてその中で、日本政府がどう動くか、日本政府が唯一の被爆国と言いつつ核兵器廃絶の条例をつくることに消極的あるいはアメリカの核の傘にいて二の足を踏んでる、今こそ日本政府を動かす時だというお話をされたんです。いまこの被爆70年という



阪口博子さん

非人道性は許すことはできないという認識で一致しているし、地球規模で破壊をする、環境問題それから医学的な見地、それから空気が汚染される、取り返しのつかない世界になるという認識で一致しているわけですから、そういう動きの中で核兵器禁止条約のステップをぜひ今度の70周年でできる年になるのではないかとというふうに思っています。

先ほどのメキシコの話も出たんですけれども、メキシコに行った時に会議の後に高校をまわったんです。高校生たちを連れて自分たちの活動を紹介してもらったために行ったんですけれど、日系二世の方が、この方は被爆には関係な

この年は、大きな核兵器廃絶の条文として法律で縛ろうという大きな流れの中にあると私も思ったんですね。だから先ほど井原会長も言われたようにNPT再検討会議というのは、大きな流れがたぶん作られる会議ではないかなと非常に期待をしております。そういった中で世界に人たちも、核保有国7カ国あるいは9カ国以外の小さな国々は、やはり核兵器の

いんですけれども、やはり被爆70年に何かを残したいという思いがあらわれて、平和の鐘というものを私が説明したんです。平和公園に行ったらこうゆう鐘がありますよと、そうしたら後からメールが来まして、ぜひ平和の鐘をどういうものか見たいと、作りたいと、ぜひ資料をくださいということで、井原さんのところの事務局でお手伝いをしていただいて、それを送ったんですね。そしたらさっそく作りたいということでそういう準備にかかっていると聞かれました。

やはり被爆70年というのは、日本だけではない、世界の核兵器廃絶をしたいと願っている世界の人たちにとっても大きな節目の年だということはやはり理解されていると思いますので、そういうことも含めて日本が進むべき道を、みんなで市民の力で変える大きな力になる、そのなかで高校生たちの動きは大きな足跡、歴史の一步を残せるんじゃないかということを感じています。だからいま高校生たちも被爆70年に向けていろんな活動を計画しています。そういうことを含めて高校生たちも世界の動きと連動できるような運動、ひとつひとつ小さな活動を積み上げて大きな運

動として、そういう世界の動きに日本の高校生たちも頑張っているんだというところを見せていただきたいし、希望を持ってぜひ頑張ってやっていただきたいなと思います。

それから先ほど何回も加害の歴史という話も出たんですけど、亡くなられた本島等さんも、やはり原爆を語るだけではだめだ、日本が起こした戦争の結果原爆が落とされたんだということを、侵略の歴史というものを抜きにしては原爆のことを語れないということを、同時に心の中に持ちながら核兵器廃絶、平和な世界の実現に向けてやっていくように、いまから高校生たちに大きな希望を持って期待をしております。被爆者の皆さんと手を取り合ってやっていけたらなと、私はサポートしたいと思っております。

井原 いま私たち被爆者手帳友の会が取り組んでいる一つの運動があります。原爆と直接にはつながっていないんですけど、戦時中の外国人捕虜として福岡の捕虜収容所から長崎の捕虜収容所に連行されて強制労働をされた人たちの中に73名の死亡者が記録されています。長崎には4カ所捕虜収容所がありましたけれど、もっとも大きかったの

は現在の香焼こうやき中学校にあった福岡第2分所という捕虜收容所でした。最大で1500人くらい收容されていました。

この人たちが、国際法に反してということになると思いますが、すけれども、軍需工場である国策会社川南造船所というところで働かされたわけです。その中で73名亡くなっています。すべて原因は明らかになっています。オランダ人が41名、イギリス人が21名、オーストラリア人が6名、アメリカ人が5名です。捕虜の中にはいま生存している方もいらっしゃると思います。また亡くなった73名の遺族がいらっしゃる訳です。

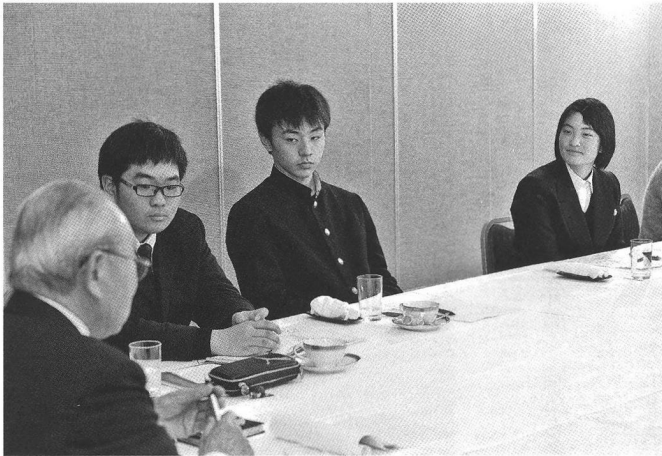
国が一つの政策として、捕虜の家族、捕虜になった人自身、そういった人たちを長崎に招待するという事業があるんです。しかし、その受け入れが県にも市にもないんです。それで私たちがやっていますが、この20日にまたオランダからみえますけれども、その亡くなった人たちの慰霊碑を作るように議会、市長に要請をしてきました。しかしどうしても作ろうとしないので、民間の力で作ろうというところで、いま準備をしています。今年の9月13日に、これは捕虜の皆さんが長崎を去った昭和20年9月13日に合わせて、

犠牲者追悼碑の除幕式を行う事にしています。日時は決まっていますが、まだ金は集まってはいいない。それでもやるということにしていますが、そうすると私たちが想像していた以上にアメリカ、イギリス、オーストラリア、オランダの駐日大使館、この反響がものすごい訳です。ぜひ大使クラスが来たいと、長崎に来た場合に受け入れはどうするかと、当然セキュリティの問題もありますから行政が黙っているわけにはいけません。賓客がみえるときに警備をする、警察官を動員するというときに黙っているわけにはいけません。当然、私たちが慰霊碑の費用を出して建てるんだけど、そのときに訪れる外国の賓客は平和な日本といえども残念ながら警備が必要です。したがって、どうするんだと聞いても返事がないから、また2月の9日と10日に県の国際課にも話をしますけれど、外務省は当然、行政はどうするんだと言っていますし、私たちの手の及ばない部分についての行政の責任、やはりこれは戦後責任ですよ。自分の国の軍需産業に従事させたわけですから、その捕虜たちに対する出身国の反応というのは非常に強く、「皆さんがやっている活動は尊敬に値する」と賞賛される

ような事業ですけど、だれかやらなくてはならないというところで、私たち友の会がその中心的な役割を担って実現させようとしています。他所を回ってみると、すべて行政がやっているんです。福岡も、佐世保も、新潟も、広島も行政が関わってやっているんですが、それを平和都市長崎はしない。こういうことが現実にありますので、われわれ

もそれに臆することなく、行政がしないから何もしないということではなく、自分たちのやるべきことはやろうというこ
とで、日にちを定めて計画をしております。

まとめになるかどうかわかりませんが、
れども、昔からの言い伝えに「老人は過去を語る。壮年は現代を語る。青年は未来を語る」という言葉があります。皆さんの活動は、グローバルで広く認知され評価されていると私は思っています。したがって未来を語るだけではなく、すぐそこにある平和への扉、未来の扉を、皆



さんが開いていただきたいと思います。それはあなた方
しか出来ないことなんです。そういう自負心を糧に今後と
も着実に普通のこととして活躍してください。どうぞよろし
くお願いします。

今年被爆70年ですが、30年後がちょうど100年の節目
になるんですけど、その時には私も含
めて一つ上の世界にいると思うんです。

おそらく被爆の実相を継承して行くのは、
あなたたち高校生の世代になってくるわ
けですね。それをほんとうに頑張って欲
しいという気持ちで皆さんお話している
訳ですが、ただ現状の中で高校生の皆さ
んも悩みなどあると思うんですね、平和
活動をされていて。同世代でもギャップ
とかあるでしょうし、30年先のことなど
考えたときに、そこら辺りのコメントを
いただけたらと思います。

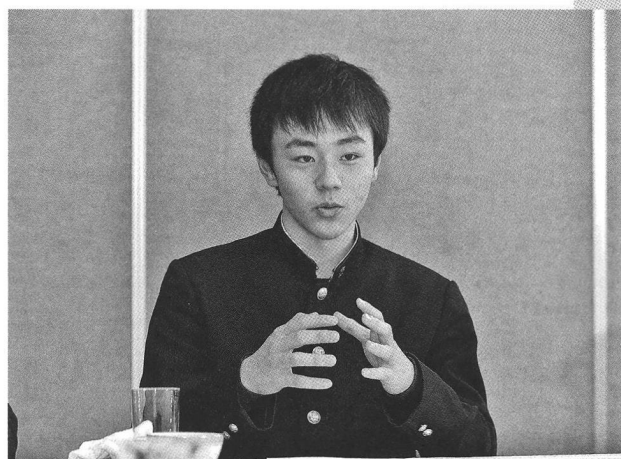
竹内（長崎東高）

私が入実際に活動する中で、小学生、中学生、高校生の修学旅行生に対して講演などする活動があるんですけど、そういうなかで他県の同世代の人たちの関心の薄さというものを感じる場面が多くて、やはり長崎は小学校1年の時から平和活動が盛んなところだと思うんですけど、やはり他県の子どもは関心が薄いなということは、私自身活動をしていて感じます。ですから私は

他県で先生をしたいなと思っていて、被爆者の被爆体験というのを聞く機会が少なくなっていく中で、他県でもしっかりした平和活動というものが根付くような教育をこれからしたいなと思っています。

平田（長崎西高）

30年後に何をやっているかですが、科学者になりたいのですが、何になっているのか分からないので、何とも言えないです。



平田尚文さん

上島 私も思ったんですね。科学者になりたいと聞いて、いま原爆が1万6000発あって、それをなくすためにはものすごい費用がかかるんですね。それを安い費用でできるように、あなたが研究して安い費用でなくすことができれば、それこそノーベル賞ですよ。30年後を目標に、それをやってほしいと思いました。

井原 戦争をして儲かり、戦後処理をして儲かるというのは彼らの考えですね。原発をなくすためには原発技術者がいなければできないんです。だから残念ながら、原発を兵器と同時に発電に使う、あれはただお湯を沸かすだけなんです。お湯を沸かすだけで原子力をおおうとしているんです。非常に高いものだけだと安いと言っていますけれど、しかし40年経ったら必ず廃炉になる。60年に伸びるかもしれません、それでも必ず廃炉になる。廃炉になったあとどうするか。それから何百年も管理しなくてはなら

ない。原子力発電所はいま全国で50数ヶ所ありすべて停止中ですが、国民の反対を押しきって例え再稼働できたとしても、やがては、必ず寿命が来ますから、普通の発電所は取り壊して新たに造ることができるとは、原子力発電所は取り壊して造りなおすことはできないんです。

捕虜収容所のことに取り組んでいる中でわかったことは、外国で亡くなった同国人はイギリスみたいに現地に葬ったり、あるいは全部国に連れて帰ったり、国によって違うんです。トルコなんかも死亡した現地に葬ることになっていきます。だからイギリスは横浜に大きな国営の墓地があります。ここに長崎で亡くなった21名の皆さんも、どんなに偉かった人でも一兵卒でも同じ寸法の平板に死亡した時の場所、名前、年齢を刻んで、一人ひとりちゃんと弔われているわけです。オーストラリアで亡くなった日本人捕虜、暴動を起こして何百人と殺されていますけれど、もちろんオーストラリア人も巻き添えで死亡されていますが、その日本人の墓地もオーストラリアのカウラには一人ひとりちゃんと慰霊してあります。

ところが日本人はどうなのか。310万人がアジア太平

洋戦争で亡くなったといえますけれど、軍人も二百数十万人亡くなっています。もちろん原爆も入ります。戦争が事実上終結を迎えてからも50万人が死んでいます。ところがそのうち150万を超える人たちが、そのまま現地で餓死している。どこで誰が死んだかわからないまま放置されています。他の国はそんなことはしていない。パラオには毎年のように行きますけれど、今度天皇が4月8、9日に慰霊の旅に行かれます。パラオにはまだ1万数千人死亡したうちの日本に持ち帰られた遺骨、弔われた遺骨は数える程しかない。1万人近い人たちが現地で見捨てられている。この様に日本の戦後処理はされていない。私の姉の夫もそうです。髪の毛と爪しか戻ってこなかった。どこで死んだのか、おそらく餓死でしょうね。そのように放置している。日本の負の歴史の中で隠されているということを知っておいてほしいと思います。ようやく百数十万の遺骨を探してその成果も出そうとしていますけれども、これも至難の業だと思えます。ほとんどが餓死です。だから戦争というのは、ほんとうに絶対にしてはならない。

井黒 5年前に国連に行った時に国連総長の潘基文パンギンさんが

「私の役目は核兵器を無くすことです」とおっしゃったんです。それでみんなも拍手して、本当に核兵器はなくなるだろうと思ったらアメリカは何回か実験をして実験しながら減らすのかなあと、ほんとに減る気配などないみたいなのはどうなるんですかね。それとイスラムでのテロ事件などあれば、集団的自衛権が重視されて憲法なども変えられるのではと危惧しています。本島さんがまだ県会議員時代に「今は平和だもんね。この平和は私たち人類が子孫に残す遺産やもんね」とおっしゃったことがあったんですが、本当にそう思います。

高校生の平和活動は私たちの励みになるんですよ。これからも注目していますから、今後ともますますよろしくお願いします。

中村 私は今、皆さん方のお顔をずっと見ていて、今は一生懸命やって被爆の体験を聞き、そして今はこのことをずっと続けていこうという気持ちで、たぶん燃えていると思うんです。でも今からさき皆さん方が社会人になられ、

そしてまた家庭人になられて子どもさんが生まれ、そうした時に、皆さん方がずっと被爆の体験を話していただけるかなと、いまふとそういう気持ちになりました。でもやはりこの体験というのは語らなければ、またそれをつないでいかなければなりませんから、それで皆さん方もできるだけ一人でも多くの方に、この被爆体験を話して、戦争と平和に対しての思いを深く認識していただくようお願いしておきます。

井黒 私たちがピースボートに乗った時も、福岡の人でも原子爆弾という言葉は聞いたけどその実情を知らなかった人は多かったです。それで朝も昼も晩も、一緒のテーブルの若い人たちの中に入って、原爆とはこんなに怖い兵器だということを話しました。

中村 日本人でも原爆というものを知らない方も多いんです。ピースボートに乗って初めて知りましたけど、みんなお膳を囲んで食事をしながら話をするんですが、一般の方にもお話をすると「そんなものが長崎に落ちたんですか」

とびつくりするような方もいらつしやいます。日本の国でさえしつかりとこの原爆というものが伝わってないから、まして外国の人たちに伝えるということは大変ですけれども、一人ひとりが一人でも二人でも伝えて行っていただければ、いつかはわかっていただける日がくると思うんです。

井黒 スペイン領のグラン・カナリア島に行った時に、「九条の碑」を見たときはびつくりしましたね。あんな小さな島に、九条の碑があつて、広島・長崎の広場を作つて、そしてテルデ市の市議さんに折り鶴のレイを掛けてあげたんですけれど、感激しましたよ。高校生も九条と書いてあるTシャツを着ていたんです。

西田（南山高校） 30年後、私は46歳になります。今でも原爆を知らない人がいるのに、30年後には本当に何もわからない人が多くなると思います。私は体験していませんけど、それをどう伝えることができるのか考えているところです。

阪口 同世代の若者たちとのギャップとかは感じないです

か。活動をやっている人とやっていない人の。さつき修学旅行生の話が出たのですが、同じ長崎にいてもそういう人たちがいると思うんですよ。

西田（南山高校） 同じクラスの中にもいます。核兵器があつても別にいいんじゃないかと言っている人がいます。その人は核がどんなものかということとは小学校の頃から平和学習で知っているけど、日本も核を持っていないと世界に通用しないという考えを持っている人もいます。それをどう説得するかというのも悩みどころです。

竹内（長崎東高）

街頭とかで署名活動などしていても、やはりお年寄りの方々の署名が多くて、なかなか自分たちの世代の人たちの署名が集まりづらくて、そういう被爆の体験を知らない人たちに街頭で伝えるのは難しいんですけど、それを分かつてもらうために自分たちは活動しているから、こういう講演会などをおしてもっと伝えていかなくはないかなと思つています。それから戦争も原爆もそうですが、今の

問題を解決するだけのために使われていて、それをする事で苦勞したり辛い思いをするのは一般の市民だったり次の世代だったりするんですよね。私たちはそういうものの後始末というのが責任だと思っうんですけれど、自分の子ども、孫、ひ孫が笑顔で平和に過ごせるためにも、自分が生きていく中で過去に犯したこと、発電所などもそうですがいま便利のために使われているけれど、後から苦勞するのは後の世代だから、しっかりそういうことを考えながらそういうものは使っうていかなくはいけないし、なくしていかないといかないかと、今日お話を聞いて思いました。

井黒 私は中学校で講演をした時に、「井黒さん、戦争とはなんですか」と言われたんです。戸惑いましたけれど、私の考えでは、武器を使っうて尊い人命やら建物を殺傷したり壊したりすることだと思っうますと言っうたんです。それから「あなたの平和とはなんですか」と言われたから、毎日



井黒キヨミ

を第一に健康で平穩無事に過ごすことが私の平和ですよと答えたら、そうですねといわれたけれど、それが正解かどうか分からないですが、でも考えてみれば「戦」という字が付くものはいろんなものがあるんですよね。「優勝戦」とかあつて頭がこんがらがつてしまいますね。

中村 私も学校で、平和について戦争と原爆の話をしてくださいということ、話をしたことがあるんですよ。たぶん4年生、5年生、6年生の方たちと思っうますけれど、原爆で亡くなつたりしたいろんな方たちの話をしたそのあくる日に、学校の校長先生から呼ばれたんです。「中村さん、昨日原爆の話をしていただいたけど、あまり戦争の惨たらしい話をすると子どもが晩に寝られないと父兄から電話がありました」と言っうたんです。その時に私は考えました。小さい若い人たちに、この原爆の話をして本当にわかつてもらえない。でも私は先生に言っうました。そのお母さんに平和のいろんなことをわかつていた

だきたい、それだけおっしゃっておいてください。それから私も学校でお話するときには、そういったことを考えながら話をしなければなりませんねと言って帰りましたけれども、やはりなかなか話というのはそういうことで、若いお母さん方は原爆がどういったものであるかということをお母さんの方が多いんです。しかしそういうことですからお話をするにしても、いろいろと考えながらしないといけないけれど、一定の年を取られた方はちゃんとわかっていますけれど、低学年あたりの子どもさんへのお話はなかなか難しいと思います。

井黒 私も保育所の子どもたちに平和についてお話をしてくださいと言われたんです。私はお話することができませんとお断りしました。保育園では子どもたちが踊って仲良く遊んでいることが平和ですよ。

井原 福島の原因被害の後、原発が津波によって被災したんだと電力会社は言っておりますけれども、実際は地震で大半が壊れてしまっていたわけですから、被災瓦礫を日

本全国にばら撒こうとする動きがありました。長崎も受け入れるということをして市長が表明したわけです。被爆者団体は被爆瓦礫を分散してはならないということで全部反対しました。ところが「絆」という言葉がひとり歩きして、なぜ長崎が受け入れられないのか、と。それは長崎が被爆地で放射線の恐ろしさを知っているからです。だからなぜ全国にそれをばら撒くのかと言えば、全国に分散してそれを受け入れるのが絆だというようなことを政府は宣伝したんです。これを受けて長崎市議会も決議をしました。反対したのは被爆者何人かでした。つまり放射線という恐ろしいものを含んだものを積極的に受け入れよというんです、市長は。それが絆だという言い方をする。そんなふうになんを受け入れないのは卑怯だというような言い方なんです。だからさきほどのように原発ぐらい持たないと他所に対抗できないという意見があるのです。その人は自分が外にいますね。私は原爆で被爆したことはない、他所を殺傷するためににはそのくらい大きなもので打ち壊してしまえということでしょうから。しかし戦争となったら、戦争は自衛隊がするものではない。日本全国が戦争なんです。だからそ

のことがわかってない人たちがまだにたくさんいます。最近また新しくそういう人が出てきた。

私たちは世界で初めて無差別爆撃を受けたと言われるスペインのゲルニカに行きました。そして向こうで戦争に絶対反対しようと、どこが戦争しても反対声明を出そうというところで協定を結んできたし、それはドイツのドレスデン、ドレスデンがヨーロッパの第二次世界大戦で一番最後に攻撃を受けました。もう負けることは分かっていたのに都市の85%が破壊されたわけです。ゲルニカもそうでした。農民が市場に集まる月曜日、その市場に無差別爆撃をした。そこがスペイン内戦の時の兵器庫だったんです。これが世界で最初の無差別爆撃だと言われているわけです。しかしそのことに對してドイツは戦後60年目に正式にゲルニカに大使を派遣して正式に謝罪をしました。自分たちは間違っていたと謝罪をしたのです。しかし日本は未だに謝罪をしていません。原爆も無差別攻撃なんです、その前に日本軍は中国重慶チンチンに何百回という総攻撃をしています。そのことについては謝罪をしていません。もちろんアメリカはパールハーバーをよく出します。厳格にというと軍事施設を

破壊したわけですから、これは太平洋戦争の引き金になった。長崎の爆心地は、もともと狙ったのは常盤橋とぎわばしという、にぎわいばし賑橋の一つ上の橋です。中島川のほとりの公園にアメリカが狙った爆心地はここだという標識があります。なぜか。戦争に嫌気をさすためにできるだけ人が密集している場所を爆撃するのが効果的だと。小倉に落とそうとしたけど曇っていたから長崎に来たわけです。しかし回っているうちにガソリンが足りなくなってしまう。それで浦上に落として帰ったわけですけれども、本当の標的は浜の町だったんです。だからやはり無差別爆撃によって厭戦えんせん気分をもたせて戦争を止めさせる、決定的勝利を納めるということでしょうね。戦略的にどこの国もそうしてきたわけですから。ゲルニカの場合は、結局第二次世界大戦にはスペインは参戦をしませんでした。ドイツの思惑は自分たちに協力させようということ引き込もうとしたんですけれど、当時の軍隊は第二次世界大戦には協力しませんでした。いずれにしろ他所の戦争にドイツが介入して爆撃をしたわけですから、その生き残りの方がまだいますし、被爆者の皆さんと一緒にゲルニカに行つて協定をしてきた。そういう

運動の先に、いま毎年やっていますがキッズゲルニカという運動があります。これはピカソの「ゲルニカ」と同じ3・5×7・8メートルの大きなキャンパスに、子どもたちの若者たちの平和の願いを書き込むという運動です。これは日本に始まって世界に広がっています。長崎にも相当海外から来れますから、これは継続して発展していこうと思っています。戦後70年目の事業として、長崎市も100万円近い補助金支出が決まりましたので、これまで民間の手でやってきましたけれども、今年は公の費用が出されるでしょう。ピカソが描いたゲルニカという絵、反戦の絵と言われています。ピカソは当時そこに行っていたわけではないですが世界の反戦の絵だということです。嚴重に国立の美術館に飾られています。昔は防弾ガラスで今では光センサーで監視されています。これは白黒ですが、いま子どもたちが描いているのはカラーで、これはこれからも続けていきたいなと思っています。これにも私たちが被爆者手帳友の会は財政的支援をしています。

長時間、ありがとうございました。



第2章

被爆二世の時代



被爆70年座談会

被爆二世の時代

—いま継承すべきこと—

◎と き 平成27年 5月19日

◎ところ ホテルニュー長崎

◎出席者 (順不同) 長崎県被爆者手帳友の会会長 井原東洋一

// 副会長 中村キクヨ

// 二、三世の会代表 野口 伸一

// // 事務局長 井原 俊也

// 会員 深堀 兼治

// 会員 江頭 玲子

(敬称略)



| 井原東洋一



| 野口伸一



| 井原俊也



| 中村キクヨ



| 深堀兼治



| 江頭玲子

井原(東) ただいまから「被爆二世の時代 いま継承すべきこと」というテーマで座談会を開きたいと思います。

本日は私と副会長の中村キクヨさんと二人で進行させていただきますけれども、中村キクヨさんは被爆者手帳友の会の前身である動員学徒犠牲者の会から、被爆者手帳友の会を創立し、今日まで一貫して被爆者の運動に携わって来られました。私自身は、中尾ダムの近くで被爆しておりまして、昭和51年末に被爆地域拡大により田中名の一部も含まれたのですが、自分自身そのことが十分理解できなくて、被爆者健康手帳を交付されたのは平成14年で、地域是正後25年くらいしてから手にしました。しかし被爆者の援護運動そのものは昭和40年代から前会長の深堀会長の下で被爆地域是正問題に取り組んでおりましたので、組織では常務理事を担当していました。

被爆70年を迎え、今後は、被爆体験と平和運動の継承という時代になっていきますので、二世の皆さんの活動が大きく期待されます。そこで今日は二世の会を代表する4名の方にご出席いただき、それぞれ自己紹介の後にテーマについてお話しいただければと思います。

まず野口さんからお願ひします。

野口 二、三世の会の代表をしております野口伸一と申します。

被爆二世であるということを自覚したのは、被爆者手帳友の会の二世代表、またその後に県の被爆者二世の会の副会長になってから、いろいろな研修会や会議に出るようになってからでした。それまでは自分が二世であるという自覚はほとんど持っておりませんでした。しかし、弟が昭和59年10月2日に急性白血病で亡くなり、原爆と関係があるんだろうかということを考えまして、私たち兄弟は病気に対する大きな不安を持つようになりました。少しでも体調が悪くなると、自分も白血病で亡くなるのかなというような気が強くしております。

深堀 被爆二世の会の会員ということでお付き合いさせていただいております深堀兼治と申します。

野口さんから誘われて二世の会として活動し始めてから5年くらいかと思ひます。私の被爆二世の自覚は、小学校

の4年から5年くらいおきに、母親から「母ちゃんは被爆しとつとやっけんね。ケロイドのいっばいあるけん、早よう死ぬけんね」というようなことを言われ、二世の自覚を植えつけられたのかなあというような感じがいたしております。

井原(俊) 昨年、二世の会の事務局長の役をいただきました井原俊也と申します。

被爆二世の自覚ということに関して言えば、さほどはつきりした自覚はないですね。会長の井原は私の父なんです。父が先ほど申し上げたように平成14年に被爆者健康手帳を取得したということですから、その時点で正式には、二世になったんだろうと思いますが、実際には4、5年前に被爆者手帳友の会の二世の会の活動に参加したり、原水禁の被爆者の語る会などに参加していく中で、少しずつ自覚が深まっていったと思います。また長崎県被爆二世の会の行政に対する



江頭玲子

要望にも参加させていただいた時に、具体的な中身が提案されていることに対して、行政のほうの回答が変わらないという状況が続いていて、そういうやり取りの中に参加させていただく中で、これは継続させていかなければならない大事な活動なんだということを改めて思っています。

もともと私は教職員でしたので、いろんな役割分担がある中で、私は平和と人権の担当になることが多かったのです。そういう意味では親が被爆者であるとか、自分が被爆二世であるとかに関わらず、28年くらい前からそういうふうに子どもたちとともに学んできたという経験は持っております。

江頭 被爆二世の会の会員で江頭玲子と申します。

私が被爆二世であるということを知ったのは定かではありませんが、結婚して子どもを産む頃でしょうか、母から「被爆二世の検診がある時は行きなさいよ」と言われて、漠然と、ああそうか、自分

は二世なんだという感じで検診を受けた記憶があります。

とくに被爆二世と自覚しなかったのは、両親は原爆が落とされる前はNBCの近くの小川町おがわに住んでいたらしいのですが、たまたま疎開をしていて、そのまま私は爆心地から10キロくらい離れた時津町で生まれ、そこで育ちましたので、とくに平和学習もなかったし、自分の近くに原子爆弾の影響があるとは感じていなかったですね。でも、自分が子どもを産んだり、他のお母さん方やいろんな方と関わっていく中で、ああ長崎は原爆の街、被爆者の街なんだと思うようになりました。

父は兵器工場に勤めていて被爆しています。歳を取ってからも汗をふるふるかきながら8月9日の式典に行っていたんですね。それはなんでだろうと不思議に思っていたんですけど、そんなこととか、もっともっといろんなことを父から聞いておけばよかったと、すごく残念に思っています。

そして2年前にたまたま野口伸一さんにお会いして、私もちよほど平和関係の活動をしていたものだから、二世の会に入らせていただいて、今は小さく活動しているとい

うところですよ。

井原(東) 最近では親からの語り継ぎというのを意識的に進めようとしているんですが、案外親から被爆体験を聞いてなかったという人も多いですね。そういう意味で、皆さん方は家族の中で被爆の体験とか証言とかいうものがどのように語られてきたのかということについてはどうでしょうか。私も自分が被爆したことを子どもたちに伝えるということとはあんまりなかったような気がしているんですけど、深堀さんの場合は、お母さんがそういうふうに教えてくれたということですけど、他の方はいかがですか。

野口 私のお袋もそうなんですけど、被爆者というのは自分から被爆体験を語ろうとはしない。それはやっぱり、その時の悲しい出来事や状況を思い出すからしゃべりたくないということなんでしょうね。私のお袋もしゃべらなくて、私から「母ちゃんは被爆した時はどうやったと？」っていうふうに聞いて、やっと「うん、ちよほど空襲警報の解除になつたけん洗濯物ば外で干しよつたら爆風で飛ばされて、

そして気のついたら防空壕の中に寝とった。ただそれだけ
たい」。もう、それ以上あんまりしゃべりたくないんです
ね。自分は無傷だったんですが、そのとき怪我した人がい
たのでそのことを思い出すのでしゃべりたくないというこ
とのようでした。

深堀 先程、親から被爆したことを聞いたとお話しまし
けど、その後は野口さんと一緒です。ほとんどしゃべって
くれないんですね。ただ「どんがんやった」とこつちか
ら聞いたのはずいぶん経たってからです。私が高校生くらい
のときでしょうかね。その時初めて、自
分が被爆して、どうやって家に連れて来
られたか、それさえ分からない。そして
庭に寝せられていたと。そしてケロイド
の傷にウジ虫が湧わいて、兄弟からも「臭
か、あつち行け。こがんとここにおらんちゃ
よか!」と言われて情けなかったと。「も
う歯痒くて、人に言うことはできんやつ
た」ということは聞きました。そしてそ



深堀兼治

の後は口をつぐんでしまつて、ずーっと話はしなかつたで
すね。今、98歳で入院して2年半になりますけれども、少
しずつ話を聞きださなければいけないと思えますけれども、
ほとんどしゃべってくれないんですね。「もう戦争のこと
はよか」と、そういう感じですが。だから本当の戦争の苦し
みとか、そういう自分自身が味わったものは我々には教え
てくれません。

井原(俊) 先ほど父が言ったように私も昔は直接、被爆体
験を聞いたことはなくて、山で焚たき木を拾っていたら爆風
で木から落ちて気絶したとか、被爆体験
の深い話ではなくて、まあ私が覚えてな
いだけかもしれませんが、状況説明のよ
うな話くらいですね。

ただ昔、国際文化会館というのがあり
まして、そこにけっこう生々しいのも含
めて原爆の資料が展示されていたんです
けど、そこにはよく連れて行ってもらっ
たという記憶があります。それはおそら

く私に伝えたいことなのかなと、今は思うんですけど。

それで、幼馴染とか同級生に吉田君という友達がいまして、彼のお父さんは被爆者の中でも非常に有名な方で、今は亡くなられていますが吉田勝二さんですね。うちには父も母もいろんな活動をしていましたから夜も出かけることが多くて、私は吉田君の家でご飯を食べさせてもらったこともあって、その時の勝二さんは右の耳に黒い袋を掛けていて、私が「おじちゃん、その袋はなんね」と聞いたら、「見すうか」と言って袋を取ろうとするんですね。友達達が「止めんね」と止めたりしたこともあったんですが、その時に原爆の話聞いて、耳が吹き飛ばされたというふうに聞いたんですが、本当は火傷で潰れたというのがあとでわかりましたけれど、勝二さんの顔にはずっとケロイドが残っていました。その前に国際文化会館でたくさんの資料を見ていましたから、勝二さんのケロイドを見ても怖いとか気持ち悪いかい印象を持った記憶はないんです。だからその後も吉田君の家には何回もお邪魔して、今もお付き合いはあるんですけど、勝二さんから原爆の話を少し詳しくお聞きしたのもその頃だったかなと思います。

井原(東) 親からの語り継ぎというのは、なかなか言いにくくて難しかったようですね。それとやっぱり子どもに対しては就職や結婚といういろんな風評被害、社会的差別も言われていたので、できるだけ語らなかつたということもあつたのではないかなと思います。

中村キクヨさんは「平和への誓い」できちんと被爆二世のことを述べられて、それが全国的に二世問題に焦点を当ててきつかけになったと思っているんですけど、そのあたりの息子さんへの思いを少し語ってもらいましょうか。

中村 私も被爆者援護の運動を38歳頃からずっと続けて参りまして、今は91歳になります。その間、被爆者としての運動はしてきたつもりですけども、二世に対する運動はほとんどしておりませんでした。運動をしている人の中には半分は二世の方もいるんだけどね、というような気持ちでした。

6年前に井原会長から、8月9日に長崎市が主催する式典に参加して「平和への誓い」をやってみなさいというところで、それならなんとか被爆のことをお話ししようとい

うことでお受けしたような訳ですけれども、書いた原稿を「これでいいですか」と井原会長にお見せしたら、「いや、なんか少し被爆者としてのインパクトが足りない」とおっしゃったんです。それで、私が誰にも言わないで心にずつと秘めていた、被爆二世の次男が白血病で亡くなったということを、この際みんなに話さなければいつ話すときがあるんだという気持ちで、胸の内の苦しみと一緒に一挙に噴き出したような気がして、それを8月9日に読ませていただきました。しかし、その前に私にも孫がおりますので、その孫が嫁に行く前にこういうことを言ったら結婚に障さわらんじやないかと思ひ、苦しい胸の内を孫たちにも相談をしたわけです。私もずっと被爆者の運動をしておりましたので、孫たちも「おばあちゃんがこれまで一生懸命運動してきたんだから、言ってもいいよ」と言ってくれましたので、それで式典でお話しました。

どうして次男が白血病を親の体内からもらったかという、長男は戦時中の栄

中村キクヨ

養不良のために母乳が出ずに与えることができませんでしたけれども、次男は終戦後の子どもです。食糧事情もいくら緩和されまして母乳がたくさん出ましたから、たくさん飲ませることができました。そういった関係で、まず病院の先生から「お母さんのおっぱいを飲ませた関係だと、僕は思います」と言われたときに、ああ、親から子どもへの因果関係があるんだということを痛感しました。そして、それを8月9日に話しましたところ、その後の反響がびっくりするほど大きくて、電話や手紙をたくさんいただきました。そして被爆二世を持った両親はこういった不安を抱いていらつしやるんだということが分かりました。それで私は、自分の被爆者運動はそれなりにやってきて目鼻がついた、しかしこれから元気な間は二世の問題に取り組まなければならないと思ひ、現在、被爆手帳友の会二世の会の運動に力を入れて、ともに被爆二世の運動をさせていただきます。



井原(東) 被爆二世だということで、今までいろんな面で不都合なことがあったかどうかについてはいかがでしょうか。

野口 私は昭和46年に結婚したんですが、私の家内は佐世保の早岐出身です。結婚してからずいぶん経ってから家内から聞いたんですが、結婚する時に母親から「長崎の人ならば被爆者か、被爆二世の人だから止めとかんね」と言われたそうです。しかし家内は「いや、病気とかなかと」と言って結婚したんです。しかし先ほども言いましたように昭和59年に弟が急性白血病で亡くなったんですが、その時に「ほら、見てみんな。やっぱりそうやったろうが。やっぱり原爆の関係たい」と言われました。うちは兄弟5人で長女が一人、私は長男ですが、一番下の弟が26歳で亡くなったんですね。だから病気に対する不安はものすごく強いですね。ちよつとどうかあればビクビクするんですよ。ですから親にすれば、とくに母親からすれば、自分の娘を嫁がせるにあたってやっぱり原爆関係の血筋の人より健康な人に嫁がせたいという思いがするのかなと思いますが、だか

らと言って、べつに私はそのことで義母を恨んだりはいしません。

深堀 私はとくに何もなく、話を聞いてなかったものから困ったようなこととか、そういうことはまったくありません。兄弟も7人おりますけれども、話を聞いたこともないですし、おかげで元気で過ごしております。

中村 私は被爆二世に対する問題でいちばん心配していることがあります。それは親から子に遺伝するという因果関係がまだしつかりと認められていないのに、被爆二世の話になると必ずこれを出さなければ、結局二世の運動にはなりませんけれども、今福島の被曝の問題もありますし、被爆二世のことを言うたびに、若いお母さんたちがこういう強烈な話を耳にした時に、やはり健康に対する不安、妊娠に対する不安、そういうものがまた新しい苦しみになるのじゃないかと思うのです。こんなことを言っているのかどうかということが、私のいちばんの悩みの種になっております。

野口 因果関係ということであれば、私の場合、五人兄弟の長男である私がいちばん濃いはずなんですけど、一番下の弟に出たのはどういふことかなと不思議に思うんですよ。

中村 私の場合はずっと甲状腺異常ということで、被爆当時からその病気を持っております。これが「がん」になれば原爆症として国から認められるということですけど、私の場合は「がん」にならないけれども甲状腺の薬を今でもずっと、何十年も飲み続けているんですね。だから息子を担当された病院の先生が、はっきりと「親子の因果関係があると思います」と言われたことを私は信じています。

井原(東) 今まで日本とアメリカ政府の予算によって、かつてはABC、今は放射線影響研究所と言っていますけど、ここが長い年月をかけて何万人もの被爆二世の調査をしております。その結果、今の段階で原爆の被害が二世に及んでいるということを認める証拠はないと言っています。が、なお研究を続けるということになっています。しかし、広島大学の鎌田七男先生は、もう少し詳しく調査をしてい

ます。両親が被爆者だった場合の二世、お母さんが被爆者だった場合の二世、お父さんが被爆者だった場合の二世がどうなのかについて、相当たくさん調査をし、報告をしているんです。鎌田先生の報告は影響があるという研究報告なんですけれども、政府はきちんと取り上げようとはしていません。そして私も放影研長崎地区の委員をしておりますので問題提起をしているんです。

原爆病院は原爆症に特化した病院なんですけど、ここで二世、三世の皆さんが亡くなった原因を調べる。あるいはそれ以外でも長崎大学とかその他たくさんの病院で亡くなった方の、被爆二世、三世、一般の方の死亡原因の中に占める白血病、あるいは甲状腺がんなどの割合を全部集めればその影響はすぐに分かるのじゃないかと提案するんですが、行政は取り上げようとしません。できるだけ被爆者という概念の人たちを増やしたくないということだろうと思っています。ですから被爆の地域是正の問題もそうですし、二世、三世の問題についても、法律を作る時に、子や孫の世代についての影響について今後検討するように、附帯意見をつけられているんですけども、政府は自発的

にしようとはしないわけです。そういう意味からも二世、三世という当事者たちが、どういうふうにするかということが大事です。

かつて被爆者たちが立ち上がって措置法ができました。

戦後12年間、措置法ができるまでに並々ならぬ努力を続けてきた結果、被爆者という存在と苦しみが世間の人に知られるようになって措置法という法律ができたわけです。そういうことから考えると、二世の問題も、いつかは法ができるだろうという形ではなくて、積極的な活動が続けられなければ、なかなか難しいのではないかというふうに思っているんですね。ですから今までは被爆一世の時代、やがて被爆二世の時代が来ますが、この時点に立って改めてどうすべきなのかという、二世の皆さんには、自分に対する課題があります。また継承という問題があります。被爆した親たちがやってきた運動とその継承、自分の健康ということについて直接的な不安を含めて、今後どうするかということについて、少しお話ししていただきましょうか。

江頭 いま不安ということを言われましたが、私は昭和22

年生まれです。昭和21年に母が男の子を死産し、そのあと私が生まれているんです。だからその子が生きていたら私はきつといないだろうかと、いつも思いながら過ごしてきました。私は二世ですが、息子は一世と二世の子なんです。で、孫が2人いるんですけど、2人とも目が悪いんです。小学1年生と5年生ですが眼鏡をかけています。その目が悪いということは隔世的なものが原因じゃないかと最近思うようになったんです。ところがこれを、息子にはまだ言っていないんですけど、息子に先にかけてからでないとお嫁さんには言えないなと思うんですね。だから一世の方たちが、自分が被爆者であることを子どもに言えなかったのはこういう思いじゃなかったのかと、つい最近感じたんですね。これはいつか自分の課題として解決しなければいけないと思っているんですけど、それは自分の病気より先に不安に思っていることです。

野口 うちの娘は被爆三世になるんですが、娘の最初の子ども、私の初孫は死産だったんです。あと1週間ほど生まれるという最後の定期検診でも心電図はきれいだったん

ですが、ところがその最後の検診日の夜に、娘がお腹が苦しいと言って暴れだしたんです。ちょうど私が家に帰ってきたら、家内が「苦しみよつとばい」と言って、それからしばらくして娘が「お腹が静かになった」と言うんで、それはいかんということで、すぐに病院に連れて行ったんですが、まったく心音がありません。それで普通分娩で出産したんですが死産でした。それから次の子どもが体重1000グラム、わずか砂糖一袋分の重さで生まれたんです。どうしてこんなに続くのか私も娘も不思議に思うんですが、娘には言っていないませんが、ひよつとしたら原爆と関係があるのかなと。三世になるからそんなことが続くのかと思ったりしても、医者も原因が分からない。それで羊水とか臍へその緒おとか大学で詳しく調べたんですが、まったく原因不明だったんです。ですから、私は娘には言っていないんですが、やはり原爆と因果関係があるのかなと思います。

野口伸一

江頭　　そういうのは思いますよね。実際に何もいない人たちからすると、はっきり分からないけど可能性があるように思いますよね。

野口　　2番目、3番目は正常に産んだんですけれど、どうして最初は死に、2回目はわずか1000グラム。保育器の中に入れられていますから、半年間毎日おっぱいをやりに行きました。どうしてか、どうしてかと、しばらく悩んだですね。

井原(東)　　いまは、そのお子さんは健康なんですか。

野口　　はい。今度大学に行きます。ただ縦横が小さくて中学生ほどの体格です。ところが当初は、目、内臓、脳も完全にできていない可能性があります、両目失明も覚悟しておいてくださいと言われましたけど、まったく健康で、ただ体が

小さいというだけです。

江頭 やはり放射能の影響というのは、隔世的にもあるんでしょか、どうでしょうか。全然ないとは言えないですよ。ただデータが出されていないから分からない。

中村 大学の先生のお話を聞くと、親と子に原爆の関係はありますとはつきり言われる先生は少ないんです。「ありません」と言う先生は多いんですけれど、「でも全然ないとも言えません」ともおっしゃるので、私の息子が亡くなったときに、「先生は、私がおっぱいをやったために原爆症になったと思いますとおっしゃいました。それで一度、そのことを皆さんの前で言っていたことはできますか」とお願いしたとき、「僕もそのことについては半信半疑ですが、それはあくまでも僕の気持ちですから」と、みんなの前で絶対的にこうだと断言できる先生はいらっしゃらない。それがいちばん残念でしかたがないんです。

野口 弟が死んだ時に、私は医者に聞いたんです。「原爆

との関係ですか」と。そしたら「いえ、そんなことはありません、原爆とは関係ありません」とはつきり言いました。

私の戸町の同級生1クラス50名、8クラスで総勢約400名いました。そのうち死亡・行方不明という人が約30名弱なんです。死亡者の病名を聞くと、甲状腺、それから白血病、がん。私の2番目の弟が前立腺がんでいま治療中ですが、そういった病気で亡くなった人が多いです。県市に毎年要求をしているんですが、健康調査をする際に、原爆とは全然関係ない他所の100人と長崎の100人を比べればすぐに分かるんじゃないかと。長崎は二世が多いはずだから、ぜひそういう健康実態調査をしてくれと要求しているんですが、全然しません。する気がないのです。

深堀 結局、その辺のところはジレンマですよ。先人の方で絶対に放射能の影響はあるという人はたくさんいらっしゃいますよね。逆にまた、まったくないという人もいます。そしたら何を尋ねていいのか分からないという状況の中で、原爆についていろいろ活動していくなかで「核兵器反対」と平和活動することが支えかなと私は思っているんです。

私の親も兄弟も目が不自由で7人とも矯正しているんです。しかしそういうことが原爆に起因するということを書いていないのですから、ただ私は疑う、そういう影響はあるかと思いつながら、みんなに広めようと活動をしています。先人たちの実態を見れば、まず遺伝はするという感じは受けます。

中村 私には嬉しかったことが一つあるんです。それはピースボートに乗って4カ月間航海しましたけれど、そのとき被爆者代表でニューヨークの国連の第3会議室で、被爆者のことや自分の子どものことを話しました。そして立派な大学の先生が「親と子の因果関係は絶対にあります」とおっしゃったんです。そして講演会場の中で話を聞いていた長崎大学の小児科の先生が手を挙げて、「いま中村さんがおっしゃった親と子の因果関係は、私は確かにあると思います」とおっしゃいました。いま来院する子どもにも白血病が多い。その因果関係を調べると親子の関係が確かにあると、だから私の証言を信じているとおっしゃったんです。そういうふうな先生も確かにいらっしゃるとい

うことは、運動のしがいもあるし、最後になったらその先生を引っ張り出そうと思っっているんですけどね。

井原(東) やはり意図的に、「影響はない」と言おうとする状況があるんです。それは福島原発災害の時に、現地で大活躍された医者もいらっしやいましたけれども、それに対して反発も相当出てきました。「にこにこ笑ってれば影響ない」とか、あるいは弘前大学から自主的に調査を申し込んだら福島から断られたとか、当時の菅直人首相に對して少女が「わたしは結婚できますか」と直接的な問いかけをしたとか、そのときの状況が目には浮かぶんです。100万人に1人しか発症しないという甲状腺がんが今100人を超えているんじゃないですかね、福島では。そういうことにも目をつぶっているという事態もあります。またアメリカの航空母艦の乗組員が死の灰を浴びたということで裁判になっています。何兆円という賠償の裁判です。そういうことが全然マスメディアで報じられないですね。今ではあたりまえの様ですが、原水爆禁止の運動というのはビキニ環礁での水爆実験で火の手が上がったんですが、

あの時の久保山愛吉さんが亡くなるという、いわゆる「原爆マグロ」というあの事件以来、世界的な広がりを見せてきた訳ですし、そういう経験があつてはじめて被爆者の救援ということに火が点いた訳ですけれども、やはり長い歴史を重ねていく中で原爆被害が明らかになってきた。だから福島県の原爆被害においても近い将来こういうことが出てくるんじゃないかなという思いがあります。

私の中では原爆と原発の区別はないんですが、これを明らかに区別しようというのが今の政府のやり方、あるいは長崎市もそうです。原発は原爆とは違うというふうな考え方が、いまだにあると思つています。長崎の平和宣言を見てもそうです。長崎大学にせっかく研究機関ができましたけれど、それは「核兵器廃絶研究センター」となつています。だから核被害ではないんです。核兵器なんですね。だからそういう点については、やはり政府の意向というものが相当に強く働いているということが思われてならないですね。そういう中での被爆二世としての今後の運動ですが、私たちは30年も遡つて二世の会を作っているんですが、まだきちんとした組織体として自立的に動ける状態には

なつていません。そこで今後、被爆二世の世代に入っていくわけですが、そういうときに自分に課された任務といえますか決意といいますか、そういうことや未来について、思われていることを話していただければと思います。

野口 会長が冒頭に言いました二世の会ですが、「何か前進があるのか」、「メリットは何か。むしろデメリットだろう」、「何の変化もないのだろう」と言う者も出てくる。だからもう会費は納めないと言う人が三重地区みえで出ていらっしゃるのです。私たちが県・市に毎年要求をしていますが、まったく前進がない。それと二世の中でまだ企業で働いている人がいますが、その方は企業の中で健康診断を受けます。別に異常がない。すると二世ということに対して何も関心を持たなくなる。メリット、デメリットというならば、メリットはなくて会費を納める分だけ損ということになる。私の兄弟にしてもそうです。「兄貴、何か前進のあるとね」、「まったくくない」、「そんなら活動しても一緒たい」。こういう人が多いんじゃないでしょうか。二世として自分にふりかかってくる問題は何も無い。いたって健康だ。という

ことであれば何も関心を持つ必要はないということじゃないでしょうかね。だから私たちが二世の会で活動をしているのを理解して、一緒にやろうという方を一人でも二人でも増やしていく以外にはないのかなと。そのためには二世の手帳でももらえれば、何か後々いいことがあるかもしれないというようにことで突破口を開きたいなど。そうしないといと二世の会の会員は増えないのかなという気がしてなりません。

井原(東) みなさんの活動が積み重ねられて、今では長崎市「原子爆弾被爆者援護強化対策協議会」(略称・原援協)や広島、長崎の知事、県議会、市長、市議会、この8者で協議会を設立している「広島・長崎原爆被爆者援護対策協議会」(略称・八者協)が一致して、国に対して被爆二世の調査、がんの検診、こういうものを正式に要求するところまでいきました。今まで議題にもならなかったのが、これまで被爆者団体、二世の会の皆さんが要望し続けてきたことがやっとテーマになったというところなんです。だから被爆者の調査も、数が少ない自治体ではできていますけれ

ど、長崎、広島のように非常に多いところでは調査ができてないんですね。ましてはがん年齢になって、恐怖はあるのにがん検診はしない。被爆体験者と称される人たちも、これは被爆地域を是正する運動の中で生まれた妥協の産物ですけども、被爆体験者の方も胃潰瘍の担当は公費でできる援助がある。しかし胃がんになったら対象外になる。そんな状況です。だから精神的な影響だけを対象にしている現実に対し、600人以上が裁判に立ち上り粘り強い闘いが続けられています。しかし、すでに600人のうち、この数年間のうちに50名以上が亡くなっているんですよ。そういう状況です。

今は、いつまた原爆が使われるかわからないという国際情勢であります。核兵器は1万6300発あると言われてます。1発の被害で70年近くも苦しんでいるのに、まだ1万6000発以上も残っている。最後の1発をなくすまでなんとかしなきゃならないという思いで、誰がするかという、被爆を直接、間接に影響を受けている世代が頑張っ ていかなきゃならないというふうに思っていますね。そういう意味で、今やるべき平和運動と、組織の中でまず二世問題

をどうするかということについて、もう少し突っ込んだ話をしましょうか。

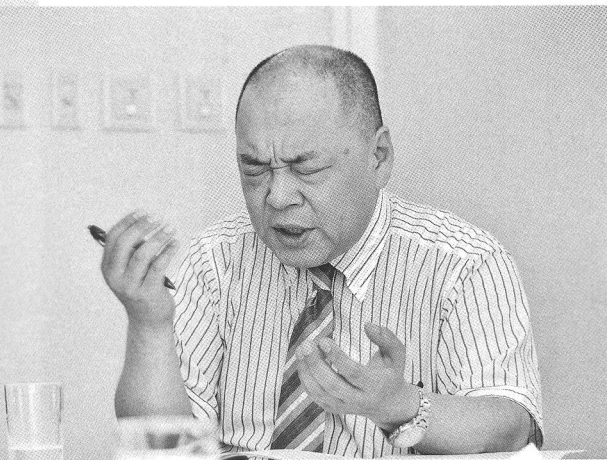
深堀 いま言われるように人を増やさないといけないと思うんですよね。確かに会費そのものは入っているかも知れませんが、実際に動いているのは5人、10人、20人とかでしょう。数では負けると思うんです。ですから今までそういう身体的遺産の調査とか、あるいは健康診断の実態調査とかいろいろされておられますので、これをさらに人を集めて幅広く闘いながら進めていかなければならないと思います。やはり人数がいないとどうしても弱くなってきましたので、まずは人数を増やすということが一番大事なかなと思っております。

井原(後) 私もまったく同じ考えですね。実際何か活動するときは、精神的に支えていただく方と実際に動く方というのは当然それぞれおられると思うんです。そうするためには、どんなことが必要かというところ、まず会員さんはどこに、どんなふう、何人いらっしやるのかというのが、具体的

にわかっていないという状況の改善。たとえば支部という形でなくてもそのようなものが結成される、あるいは結成できるのかの把握ですね。あともう一つは活動していることとかいろんな情勢を含めて、広報していくという活動が必要になってくるのかなあと思います。たとえば友の会でこういうことをしてますよというようなことや、構成団体の一つになっていきますけど、長崎県被爆二世の会の活動の中でとか、あるいは民間の市民団体での活動とか、一世のいろんな広がりや前よりも出てきている中に二世も運動した活動もあると思うので、そういったものも含めて宣伝というか、伝えていくという作業が必要なのかなと思います。実際、毎月9日は平和の鐘を鳴らした後に慰霊祭をしているところについては、まだ現役の方はあの時間帯ではなかなか参加できないにしても、どこかの時点で、ああ、こういうことをやっているんだという、参加のきっかけが分かっているれば、たとえば土曜日とか日曜日に重なった時は参加できるでしょう。あるいは、先ほど言いましたように市民団体との連携でいえば8月6日から9日まで「鳴らそう会」ということで、平和の鐘を鳴らしています

けども、そういったところにもどこか1日参加するとかいう調整の仕方もできます。あるいは8月8日には原水禁の一つの形として「被爆者と語る会」がある。また「座り込み」もそうですよね。友の会独自の研究会もあります。そういういったものも現役の世代の方は仕事との関係があるでしょうけれども、そういうことをやっているということをお伝えることですね。今まで伝え方が足りなかったのではないかと思います。

それと先ほど野口さんも言われましたけど、健康診断についても、企業に勤めている方とかは当然そこでも受けられるわけですから、被爆二世の検診は必要ないと思われているかも知れませんが、逆にも、逆に会社に勤めている方でも二世の検診は絶対に受けないといけない、という考えを持っている方もおられるんです。そうしないとこの制度はなくなるよと。私たちが求めているのは、これにがん検診を入れようとしていますけど、こんなのはできるわけないと言いなながらも、



井原俊也

東京とかでは実際にやっているわけです。やっている自体にこっちが合わせていくという運動を進めていかないと、たぶん要求しないとそこで終わってしまうのかなと思います。

いずれにしても今ここに4人いる中で、今以上に増やすためにはそういった取り組みが必要になってくるのかなと思います。実際にはお話を聞くのが一番いいんですけど、証言集などの読み合わせといったこともしたり、もう一つの団体がしているような、歌を歌ったりするフェスティバル形式のようなものも入れて2部構成のようにしてするなど、一般市民の中に垣根を下していくというようなことをしていけないといけないと思います。

もう一つは被害に遭っている人がさらに被害を受けるのが風評被害だと思わなくても、実際、東京で野菜を買いに行ったら、「福島の者だったら帰れ」と言われたとか、学校現場でも「お前、うつるからあっち行け」と言われたとか、

そういったことは絶えないわけですね。被爆者の方はもっと酷い差別を受けて悲惨なことだったと思います。二世の人たちも結婚のこととか就職の採用の問題とか、そういうのを恐れている方はたくさんおられます。自分がバレたら今度は子どもに、つまり三世にいろいろあるのじゃないかと、そっちの方を考えてしまうんですね。

運動の対象は誰なのかということを見失わないようにして、一人ではなかなかできないので、志を同じにする人を一人でも多く集めた組織にしていかななくてはならないのかなと思っています。何からとつかかれるか、こんなことをしますよということをお知らせするところから始めないかね。

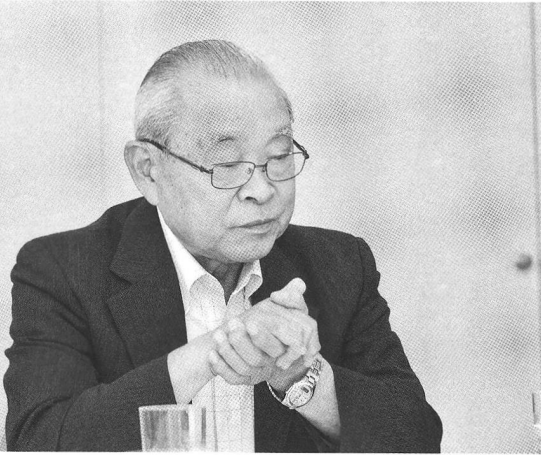
井原(東) 江頭さんは平和案内人をされているんですね。その中で感じられることは何かありますか。

江頭 私は基本的に修学旅行の生徒たちを主に、浦上地区を中心に原子爆弾で被害に遭った場所を連れて回ります。最初に子どもたちに挨拶するときに、長崎に来た皆さんに

「平和とは何だろう」と聞きます。すると、「穏やか」とか「普通のことができる」とか「戦争がない」とかって子どもたちが言います。その時に、「辞書では平和とは、一番目に二つと代わりがないということ、二番目に戦争がなくて世の中が安穩であるということが書いてあります。長崎で平和というと二番目の戦争、原子爆弾がないということなんですよ」、というお話をして、原子爆弾のことから入ります。原子爆弾の特性をフリップにして出しながら説明し「みなさんは当時被害に遭ったすべて場所を、瓦礫の中を歩いて行くんですね」と言い、あとは部分的な説明をしながら歩きます。そして最後に挨拶するときに原子爆弾が落ちた二つの場所の説明をして、今の原子爆弾は水素爆弾ですけれども、それを持っている国が10カ国あるということ、これを2発日本に落とすと日本の人口1億2700万人が皆殺しになること、地球上には1万6000発以上の核爆弾があること、こんな怖い状況にあるけど、最初に聞いた平和とはということについてとても難しい問題だけど、せっかく長崎に来られたから、学校や家に帰ってから、大人になってからでもいいので、平和について話が出たと

きにもう一度長崎のことを思い出して考えて欲しいというふうにお話しします。人間だから話し合いで解決できることがあるから、いろんな議論をしてほしいということですね。めくります。小さいことですけど、子どもたちにそういう機会を与えてもらってることがうれしくて、子どもたちと楽しみながら接して、平和ということの話をしています。長崎では原爆ということ、もちろん被害に遭っている方のお話とかしていますけど、それも小さい一つの平和学習かなと思ってやらせてもらっています。

井原(東) 高校生1万人署名活動とか平和大使が大変活躍していますが、もともと平和大使を派遣することは市民運動のなかから生まれてきたことなんです。平和大使として軍縮の専門機関であるジュネーブの国連に行ったときに、自分たちが平和大使として行ったときに、もう少しインパクトのあるものを持って行った方がいいのではないかとということで1万



井原東洋一

人の署名が考え出されたんですね。そして今や1万人どころじゃなく20万人を目標に署名活動をしているようで、実際にも広がっています。毎年行く韓国でも高校生が一緒になって署名活動をするというようなこともおこなわれています。1万人署名活動から生まれた「ミサイルよりもエンプツを」という運動は、とくにフィリピンの子どもたちに学用品を贈る取り組みです。それから平和資金を集めて恵まれない子どもたちに教育を受けさせるという資金援助もなされています。

そういう運動の中で「ビリョクだけどもリョクじゃない」という言葉を、彼らは体験の中から生み出したんですね。微力なようだけれども無力じゃない。ちゃんと力を持つんだということですね。それと「伝えなければ伝わらない」思っているだけじゃなく、伝えなければ相手に伝わらないんだということ合言葉にして頑張っています。

こういう運動が全国的な広がりをもつ

て、そして大人社会にも、政治的にも影響を与えている。外務省が表彰しなければならぬという状況になった。国連からも評価を受けるといふ状況になってきているわけです。そういう芽も大事にしながら、私たちもせっかく被爆者手帳友の会という組織がありますから、この友の会という組織を母体にしながら二世という組織の顕在化も図らなければならぬ。そして当然これは平和運動の担い手に、核廃絶、核兵器廃絶、「人類と核とは共存できない」という、我々がスローガンに掲げている「核も戦争もない平和な地球を次の世代におくる」という任務を、ぜひ果たしていかなくてはならない、果たしてもらいたいと思っっているわけです。そういう意味では今年をきっかけにして皆さんを中心に、被爆者手帳友の会の中の被爆二世の会も充実させて、文字どおり運動体になっていってほしいという願いを私たちは持っているわけです。

最後に、そういう点についての決意を一言ずつ訴えていただいで、そして他にできている二世の会の皆さんとも連携を図らなければならぬ。私も他の団体にも呼び掛けているんですけども、それぞれ二世の会を作るのはいい、

作るのはいいけど連帯しようと。お互いに協力ができようなり方をしていこうというふうに呼び掛けておりますので、そういう点でも長崎県二世の会でも重要な役割を担うところまでいってしますので、被爆者手帳友の会としても、今年70年を機に継承すべき一つの大きな課題として、我々も自分のこととしてバックアップしていきたいと考えておりますので、決意のほどを締めくくりに一言ずつお願いします。

野口 被爆者手帳友の会の二世の会には約100名近くいるんですよ。その中で、私が「入ってくれんか」ということと入れた人たちが30人くらいいるんです。私が代表になって友の会の勉強会をしようということと一人ひとりに案内を出したんですが、参加したのは一人です。1回目も一人、2回目も一人。関心がないんですよ。私が電話して何人か呼んだんだけど、その時はちょっと都合があるということで来ない。結局そういう状況なんです。これをなんとかしないといかんということと、まず親に相談をすることにしたんです。親が「行ってこい」と言ってくれれば

来るんじゃないかということで、2回目ときは被爆者のところに行っただんです。「どうぞ、行ってこい。行って顔ば出せ」という形を取ってもらったんだけど結果は1名。それを何とかするために、自分が呼び掛けて入ってもらった人たちになんとか来てもらおうという努力をしてみたんですが、結局私が案内した人はゼロ。「友の会からも来たよ」ということは言ってみただけでも「ちょっと都合が悪い」という結果でしたので、何人か、10人でも20人でも寄れば勉強会したいなあ。いま二世の会がどういう取り組みをしているかということをしように思うんですけれども、どうしたらいいんでしょうかねえ。私はそのことを悩んでいます。

中村 いま、高校生が平和運動を盛んにしておりますよね。高校生は、二世の子の三世ということで一般の人ものすごく関心が高いですけども、本家本元の二世の大人には、高校生みたいな気持ちは少ないし、そしてまた特に運動ということもないし、高校生からお株を取られるということではないですけども、高校生を頼っている、高校生が運

動するからもう大丈夫だという気持ちもあると思うんですね。だから本当に大人になった二世の方たちは、出て行って、高校生みたいにどんどん運動をしていかなければ、本当にだんだん減っていきますよね。運動というのは一番大切なことだと思います。

深堀 私も3月26日だったですか高校生と一緒に韓国に行かせてもらったんですけど、彼らの熱意には本当にびっくりしました。負けました。よく勉強もされてるし、また学校の応援もすごいですね。野口さんと「すごかね、この高校生たちは。もう真似しきれらんね」という感じで話したことでした。しかし、帰ってきてから反省のレポートを出しなさいということでしたが、その文章を書こうかと思っても筆が進まず、書けないんですよ。10日ばかりかかって事務局の方に送りましたけど、やっぱりそういうふうな熱を持ってもらうために何をしなければならぬのかなと思いつながら、ずっと考えてはいるんですけど、なかなか難しいと思います。いま言われるように、一人でも二人でも引張って、そして被爆二世は友の会として、長崎の鐘や署名

運動などをしてるんだということをもっともつと広めていかないとなあと思うっております。そしてまた先ほども言いましたが、健康診断の問題なども、いま会長さんが言われたようにせじょう組上に乗ったということですので、そういうことももつと押さないといけないのかなというようになことを感じております。

井原(俊) 人を集めるのは非常に難しいと思うんですけど、先ほど申し上げましたように、こういう活動をしていくということが分かってもらえてない。私たちも分かっていない部分があるんでしょうけれど、実際に二世の方に広がっていないということがありますので、早急に何らかの形で目に見えるものをつくらなければいけないかなと思います。それこそ9の日は毎月のことですから、それにいろんなことを、今こういうことを要求しているということを掲げてやっていきたいと思えます。

先ほどの二世の問題がテーブルに乗ったということも、私は詳しく知らなかったという部分があつて、そうかなというくらい認識しかないので、そういったことも含め

て、まず二世の方に知らせるといふ作業をして、その中でやり取りができるようになった時には、ネットなども使いながら連絡を取り合つて、できるだけそういう体力がついた時、友の会の二世としてアピールできるものを作ればなというふうには思っています。まずは4人から8人ぐらいまでは増やさないと。倍增計画で行きたいと思えます。実際に何をしているか分かっていたら、これだったら参加しようかなという人もいらつしやるんじゃないかなと思うんですけど、今までの学習会も、ちよつと単発で案内をしていたような形もあつたのかなと思います。

野口 会長が言った「親がかり」といった部分もあるんですけど、自分が二世の会の会員だということを知らない人もいます。親が会費を納めている二世もいる。ただやはり案内をする際に、ただ勉強会をやりますよということだけではなくて、長崎県の被爆二世の会では行政にこういうことを要求しているんだというようなことも書いた案内もいいのかと思います。

江頭 勉強会は昼と夜、どちらにしているんですか。

野口 昼間にしています。

江頭 現役の方は、昼間は無理でしょう。だから、夜は大変かもしれないけど月に1回なら1回、とにかく集まって、例えば証言集を読むとか、そういう簡単なことからでもしていれば、誘いやすいんではないでしょうか。一人ひとりアクションを起こすということで、例えば私は野口さんから声を掛けていただいて、初めて街頭に出て、そして自分も二世というのをさらに自覚してきました。そうなると思える目がだんだんと違ってきます。被爆者の方とお会いした時でも、話をされればやはり聞き方が変わってきます。だから分かっていても自分も行動を起こさなければ、目が開けない耳が聞けないということだと思えます。だから4人といっても、他の3人はわかっていらして私はまだそう分かっていないんですけれども、みんなと同じことをしていく中で一つずつ一歩ずつ階段を上がると思えます。だから一般の人の時間帯に合わせて、少なくとも4人は絶



対に集まる。そうすることで一人来られればラッキーだし、それからしかないんじゃないでしょうか。来られなかったら被爆者の方をお願いして、何とかありませんかという呼び掛けもできる。まず一人、まずもう一人を増やしていく。そこからでもいいと思います。

井原(東) 被爆二世が主役の時代を迎えますが、これまでいろいろやってきた行動は引き続きやる。つまり「継続は力」というふうに思います。したがって今年を機に、いわば少し脱皮して自らが主役だという認識を新たにしながら、とくに友の会の中から他にも広げるように頑張っていければなと思います。

ここにいる皆さんは友の会被爆二世の会の四天王と違って、頑張っていたきたいなと思います。一人抜けても始まらない。だからきちんとした組織化も含めて、友の会としても財政的な措置を含めて顕在化できるようにしたいと思っています。ぜひ次の世代は任せてくれということ、私も皆さんの決意を聞いたように思いました。

今日は本当にありがとうございます。